平成10年度前期企画展

今どきの考古学

くまもと考古速報展

Archaeology Today Kumamoto

熊本県立装飾古墳館

平成10年度前期企画展

今どきの考古学

くまもと考古速報展

Archaeology Today Kumamoto

今どきの考古学―くまもと考古速報展―の開催にあたって

熊本県内では、毎年数多くの発掘調査が行なわれていて、全国的にも同じような状況にあります。そしてその多くは各種の開発に伴う緊急調査です。ところが新しい発見や珍しい出土品の一部については、テレビや新聞紙上で紹介されることもありますが、調査が終われば、出土遺物など調査成果の大半は一般の人々の目に触れることなく倉庫の奥深くに納められるのが現状です。

そこで当館では、このような調査成果と共に、各遺跡から出土した貴重な遺物を、一堂に集めご覧頂くことにより、郷土の文化財をより身近に感じて頂き、地域を見つめ直す機会となれば、との思いでこのような展示会を企画いたしました。

今回の企画には一見華やかな発掘報道の陰で、発掘調査を遂行してきた各自治体の文化財担当者や、地道な発掘調査を根底で支えてきた地元作業員の方々のそれぞれの想いも込められています。

こうした機会を通して、文化財の保護に一層のご理解を深めて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本企画展にご協力を賜りました関係機関に心からお礼申しあげます。

1998年4月

熊本県立装飾古墳館
館長　桑原憲彰

CONTENTS

『今どきの考古学―くまもと考古速報展―』開催にあたって …… 3
目　次 …… 4
凡　例 …… 5
展示資料遺跡地図 …… 6

旧石器
石の本遺跡(熊本市) …… 8・9

縄文
小浜遺跡(五木村) …… 12
上中原遺跡(菊陽町) …… 13
鶴羽田遺跡(熊本市) …… 14・15

弥生
ぬきや遺跡(西原村) …… 18
神水遺跡(熊本市) …… 19
前原長溝遺跡(菊水町) …… 20・21
五丁中原遺跡(熊本市) …… 22・23
梅ノ木遺跡(菊陽町) …… 24・25
白藤遺跡(熊本市) …… 26・27
方保田東原遺跡(山鹿市) …… 28
ヲスギ遺跡(植木町) …… 29
水源地遺跡(熊本市) …… 30

古墳
柳町遺跡(玉名市) …… 32・33
上松山遺跡(宇土市) …… 34・35
物見櫓古墳(竜北町) …… 36
迎原西遺跡(城南町) …… 37
木柑子高塚古墳(菊池市) …… 38・39
小塚古墳(天水町) …… 40
つつじヶ丘横穴墓群(熊本市) …… 41
荻迫横穴墓群(西合志町) …… 42・43
瀬戸口横穴墓群(七城町) …… 44
一ノ谷横穴墓群(熊本市) …… 45
椿原古墳(宇土市) …… 46

奈良・平安
鞠智城跡(菊鹿町) …… 48・49
国分寺(熊本市) …… 50・51
池辺寺(熊本市) …… 52・53
うその谷窯跡(八代市) …… 54・55
皮籠田A窯跡(荒尾市) …… 56
熊本大学構内遺跡(熊本市) …… 57
勝福寺跡(深田村) …… 58
塔ノ本遺跡(植木町) …… 59
二本木遺跡(熊本市) …… 60

鎌倉・室町
今古閑・久保遺跡(植木町) …… 62・63
吉部原遺跡(植木町) …… 64
灰塚遺跡(深田村) …… 65
西原遺跡(相良村) …… 66・67
祇園遺跡(白水村) …… 68
蔵城跡(錦町) …… 69
田中城跡(三加和町) …… 70

江戸
佐敷城跡(芦北町) …… 72

参考文献 …… 74
展示品一覧 …… 75・76
写真・図目録 …… 77・78・79
展示協力者 …… 80

凡　例

1　本書は、平成10年度前期企画展『今どきの考古学―くまもと考古速報展―』に伴う展示図録である。

2　展示会及び本書の編集は、装飾古墳館の企画をもとに各遺跡調査担当者に執筆を依頼し、事実関係を除く言文については、編集段階で加筆訂正するなど統一させて頂いた。

3　本書に収録した遺跡は、41にのぼるが、展示にあたっては各調査主体の事情もあり、36遺跡であった。

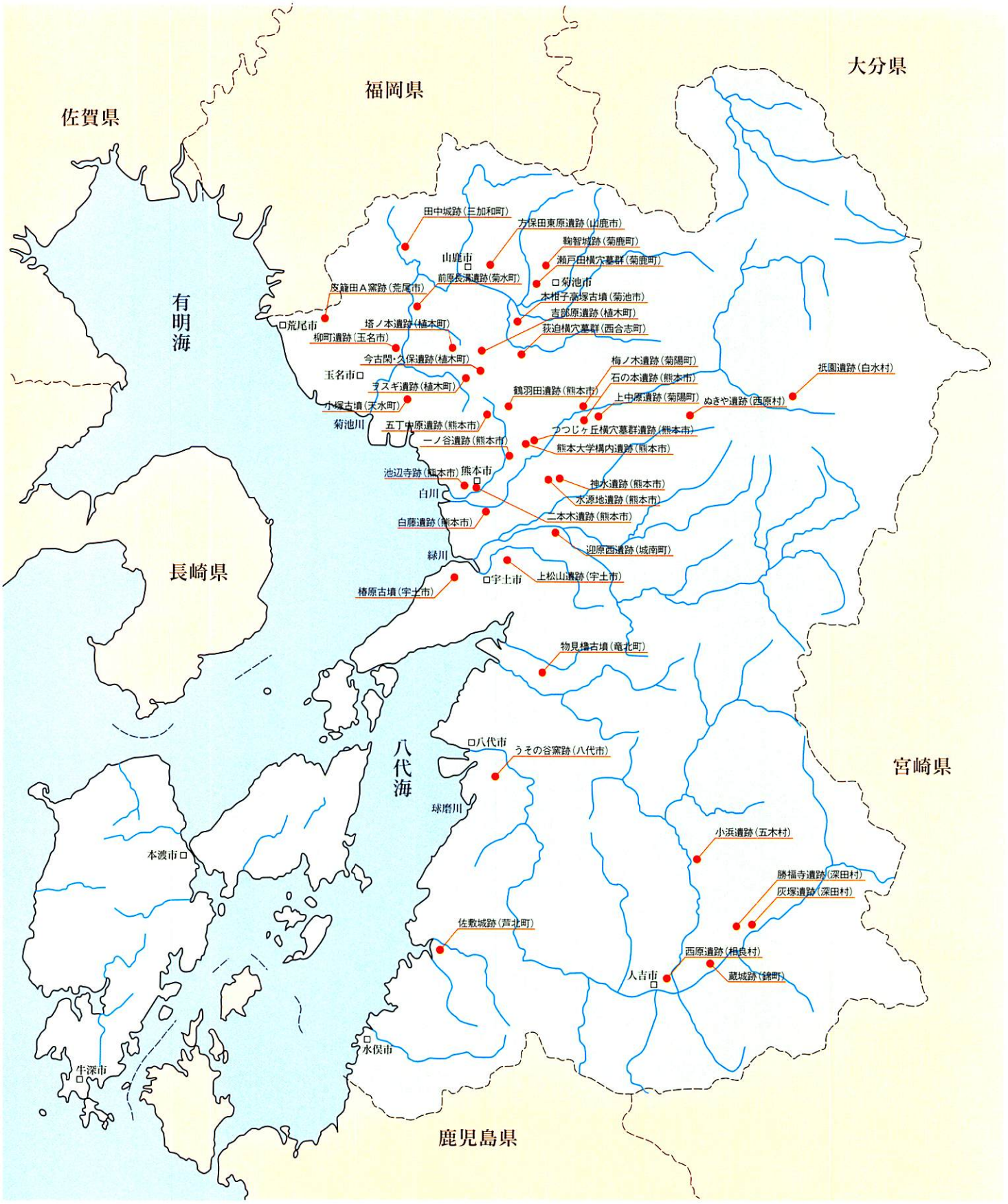
4　本書に紹介した遺跡は、地域を超えて年代順に掲載した。その際の時代区分については、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の区分を使用したが、鎌倉時代以降中世～近世にかけての時代呼称については、一部個々の遺跡の時代背景を考慮して、南北朝時代、安土桃山時代等の名称も併せて使用した。

5　掲載した写真はすべて各教育委員会撮影のものを借用させて頂いた。

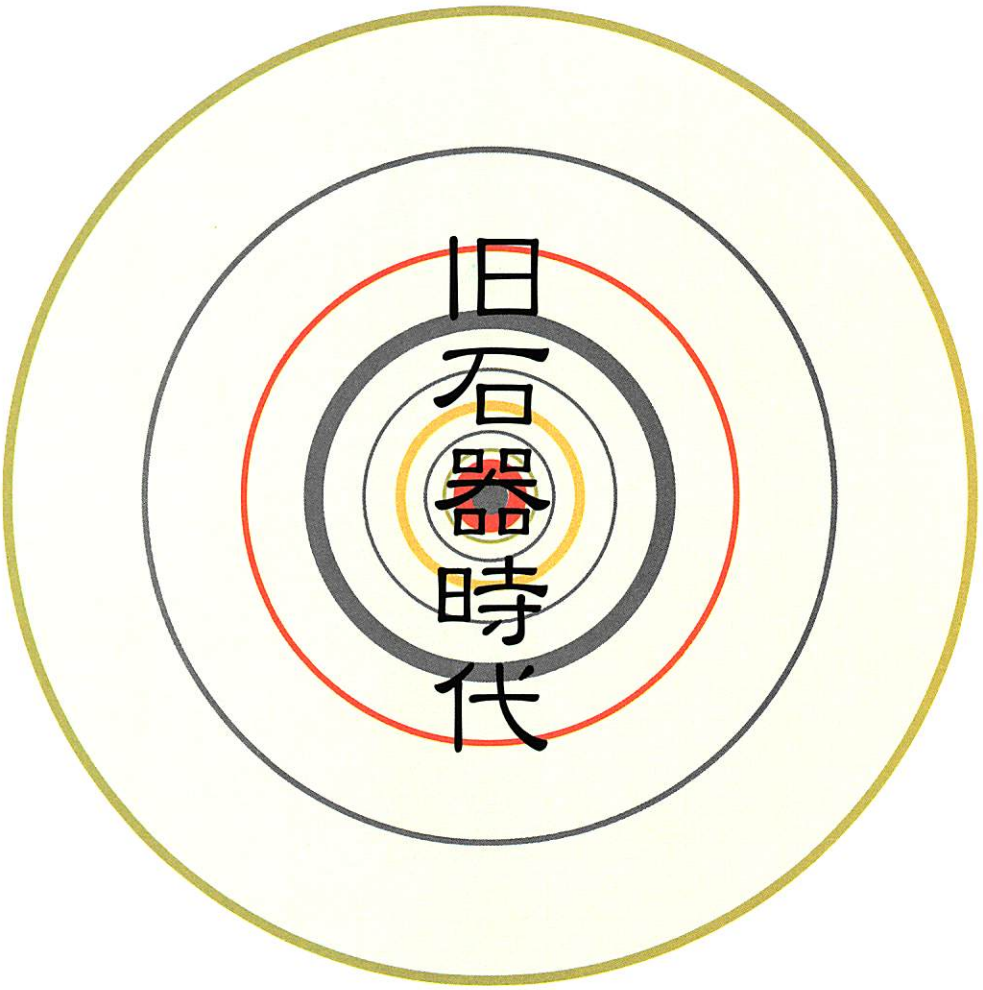
6　本書の編集・校正は学芸課　野田拓治・長谷部善一が行なった。

7　なお、本書の装丁は以下のとおりである。

印刷仕様
・判　　型…　A4判
・頁　　数…　80頁
・組　　版…　写真植字（15級 明朝基本）
・印　　刷…　オフセット印刷
・製　　版…　スクリーン線200線で製版
・用　　紙…　表紙（アートポスト4/6　200kg）
　　本文（マットコート4/6　110kg）
・製　　本…　左無線綴じ
・表面加工…　マットニス引き


佐賀県
福岡県
大分県
有明海
長崎県
八代海
宮崎県
鹿児島県
田中城跡（三加和町）
方保田東原遺跡（山鹿市）
鞠智城跡（菊鹿町）
瀬戸田横穴墓群（菊鹿町）
山鹿市
菊池市
前原長溝遺跡（菊水町）
皮籠田Ａ窯跡（荒尾市）
本柑子高塚古墳（菊池市）
吉郎原遺跡（植木町）
荒尾市
塔ノ本遺跡（植木町）
荻迫横穴墓群（西合志町）
柳町遺跡（玉名市）
今古閑・久保遺跡（植木町）
玉名市
梅ノ木遺跡（菊陽町）
石の本遺跡（熊本市）
抵園遺跡（白水村）
ヲスギ遺跡（植木町）
鶴羽田遺跡（熊本市）
上中原遺跡（菊陽町）
ぬきや遺跡（西原村）
小塚古墳（天水町）
菊池川
五丁中原遺跡（熊本市）
つつじヶ丘横穴墓群遺跡（熊本市）
一ノ谷遺跡（熊本市）
熊本大学構内遺跡（熊本市）
池辺寺跡（熊本市）
熊本市
神水遺跡（熊本市）
白川
水源地遺跡（熊本市）
二本木遺跡（熊本市）
白藤遺跡（熊本市）
迎原西遺跡（城南町）
緑川
宇土市
上松山遺跡（宇土市）
椿原古墳（宇土市）
物見櫓古墳（竜北町）
八代市
うその谷窯跡（八代市）
球磨川
小浜遺跡（五木村）
本渡市
勝福寺遺跡（深田村）
灰塚遺跡（深田村）
佐敷城跡（芦北町）
西原遺跡（相良村）
人吉市
蔵城跡（錦町）
水俣市
牛深市

展示資料遺跡地図

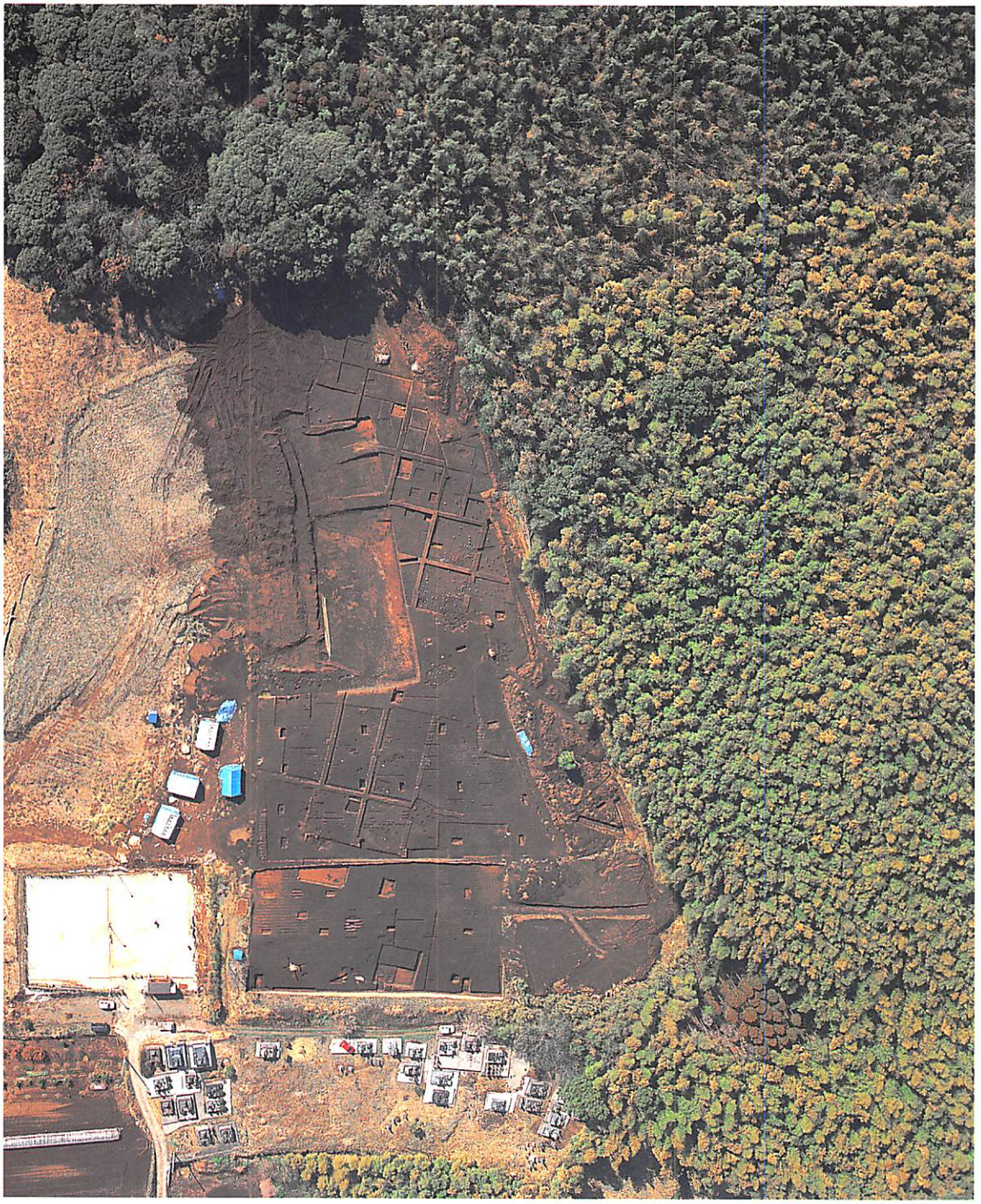

旧石器時代

石の本遺跡（熊本市平山町字石の本3.129番地ほか）

旧石器時代～古墳時代

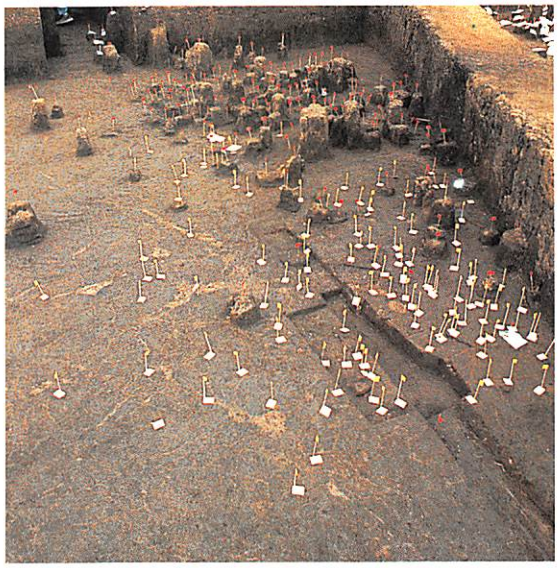
石の本遺跡は、託麻三山の一つ小山山東麓の標高約105m～107mに位置し、小山山から延びる丘陵の南側斜面に立地している。東側には阿蘇の外輪山や中岳を一望でき、間に白川の開折による段丘面が広がり、旧石器時代から中世にかけて多くの人々が住んでいた跡が見つかった。本年度の調査で最も注目されるのは、旧石器時代の生活痕跡が4つの層（4つの異なる時代）から発見されたことである。この時期の遺物としては、ナイフ形石器や石器を作ったときに出来る剥片、石器を作る道具類が出土している。

この遺跡は、平成6年度から発掘調査を行なってきたが、この遺跡も含めこの周辺一帯は平成11年の「くまもと未来国体」の会場となる予定である。　（廣田 静学・池田 朋生）



▲空から石の本遺跡全景

▲旧石器遺物出土状況



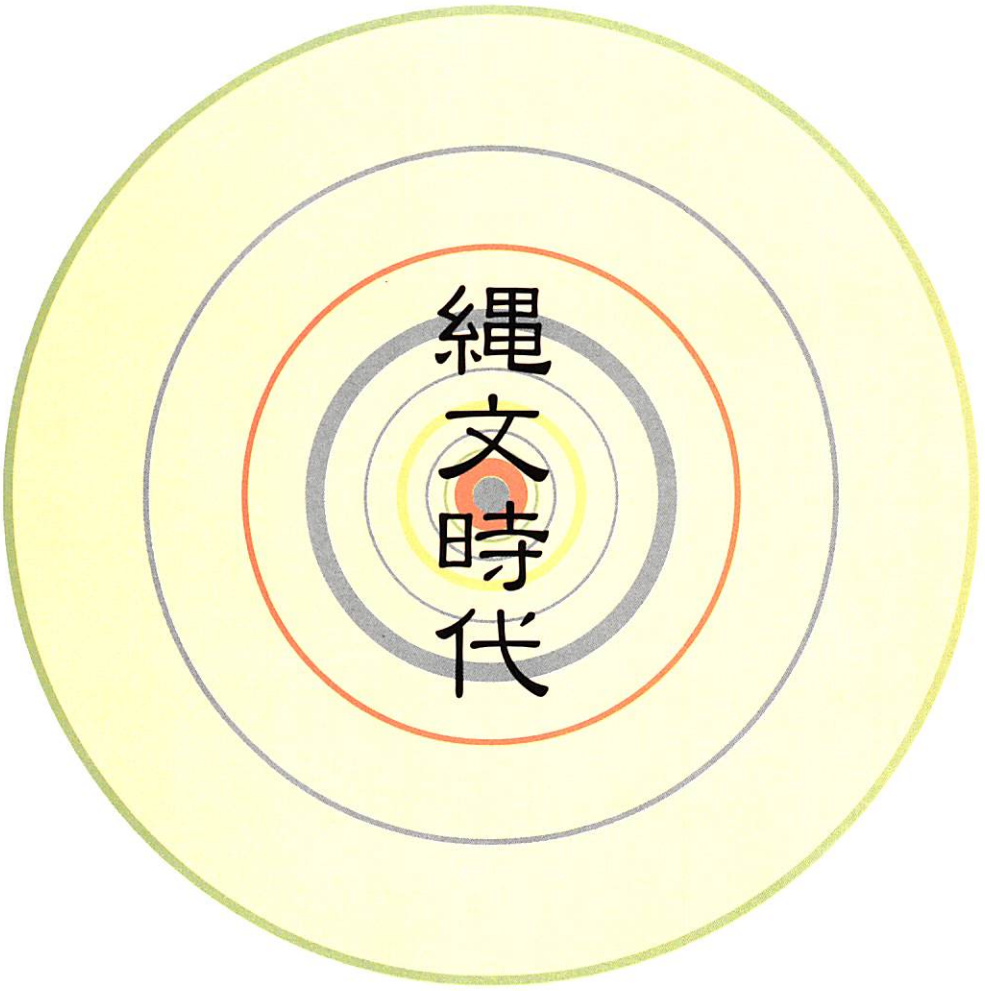
▲旧石器遺物出土状況（赤は石器、黄は炭の出た位置を示す）

▲局部磨製石斧出土状況

▲局部磨製石斧出土状況（近景）

▲狸谷型ナイフ形石器出土状況

▲三稜尖頭器出土状況


縄文時代

小浜遺跡（球磨郡五木村小浜）

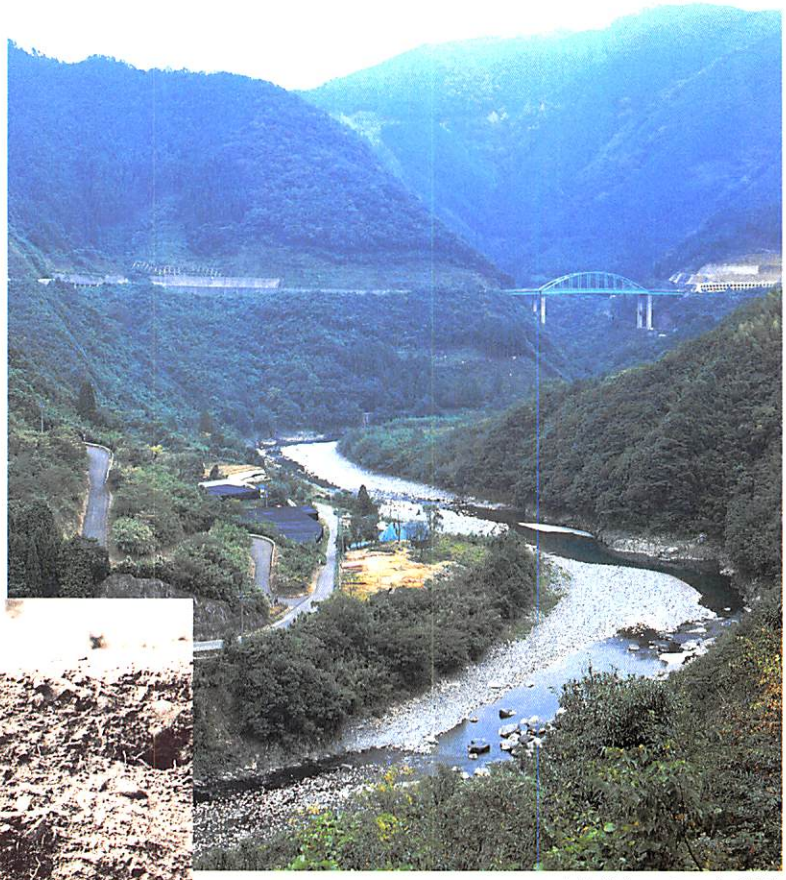
縄文時代中期～後期

小浜遺跡は、五木村と隣接する相良村との村境近く、川辺川左岸に位置している。この遺跡は、川辺川の侵食によって形成された低河岸段丘の狭いテラス状の平担地に立地する。

遺跡内には、観音堂がありその周辺は最近までこの地区の墓地として利用され、また同敷地内にはお茶畑等もあり各時代ごとに土地利用の変遷をたどることができる。

出土遺物は、縄文時代中期から後期の土器及び石器が主で出土遺物点数は約5.400点を数える。出土土器を見ると、縄文時代中期の並木式土器、阿高式土器がある。また、縄文時代後期の南福寺式土器など凹線文系の土器等もあり、貝殻を使って文様を施した市来式土器も出土している。

（福原　博信）



▲上流対岸から見た小浜遺跡

◀小浜遺跡は、蛇行しながら南流する清流の左岸にある山間部独特のV字谷地形のごく限られたテラス状の平担地から多量の土器が出土した。

上中原遺跡（菊池郡菊陽町大字辛川）

縄文時代後期～晩期

上中原遺跡は、菊陽町を流れる白川の左岸台地上に所在し、熊本市の国体主会場から東に約2kmに位置している。遺跡周辺の標高は約95m前後であり、ここから白川に向かってゆるやかに下っている。調査は、熊本未来国体に伴う町道曲手小山線拡幅工事に先立ち、菊陽町教育委員会で実施した。調査地区は以前の圃場整備や耕作によって大半が破壊されていたが、わずかに縄文時代の遺構が残されていた。縄文期（後期末から晩期）の遺構は、竪穴住居跡2軒、屋外炉跡2基、方形状溝跡1基等を検出した。遺物は、晩期の御領式土器が出土し、わずかであるが三万田式土器・辛川式土器、祭祀遺物と考えられる土偶などが出土した。石器は、円盤型石器をはじめとする打製石器・磨製石器・磨石・石鏃などが出土した。また、遺跡の東側に、南北にのびる近世から近代まで使用されていたと思われる道路状遺構も検出した。

（岡本　勇人）

遺跡調査風景▶

土偶出土状況▶

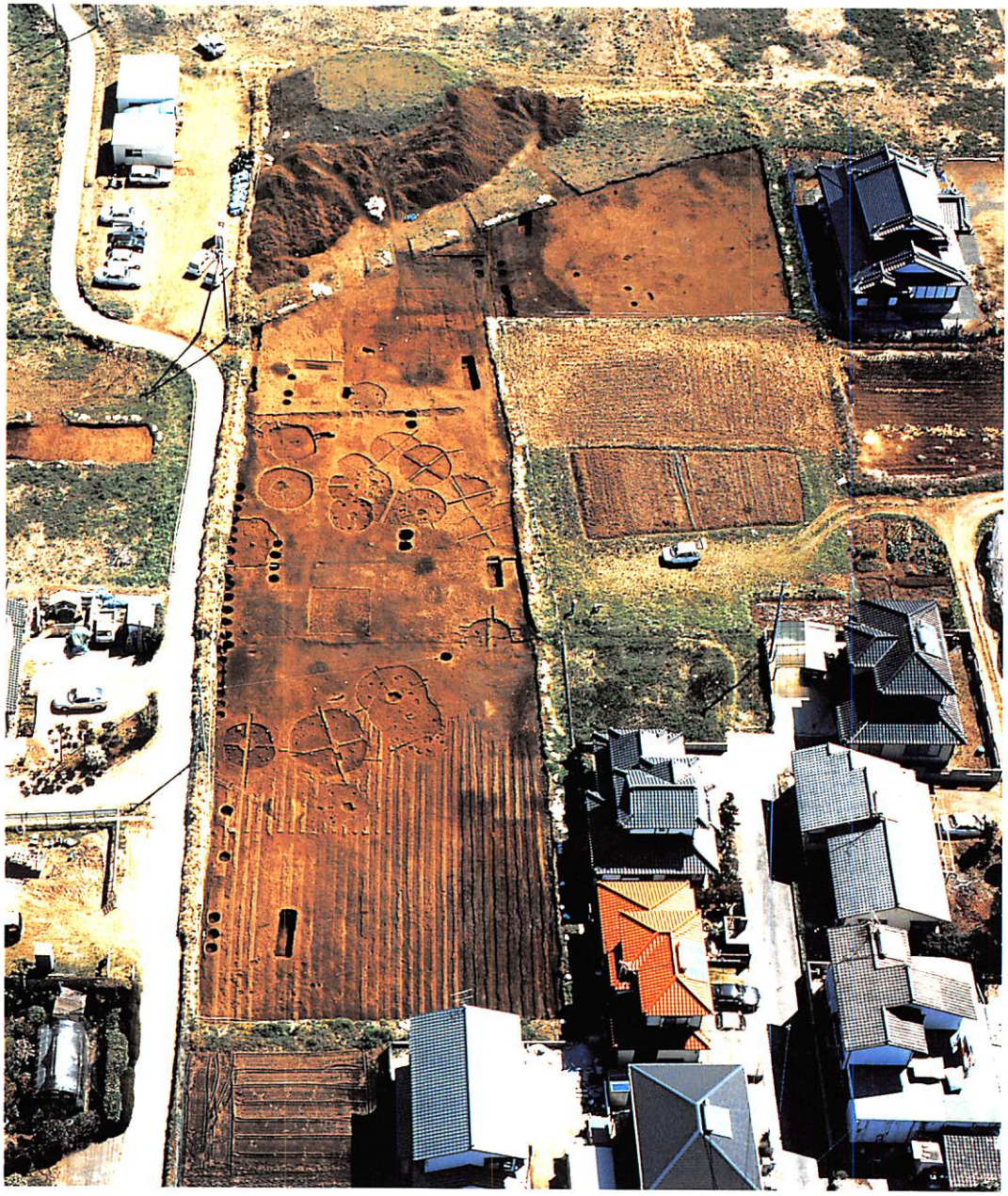
縄文時代後・晩期

鶴羽田遺跡（熊本市梶尾町鶴ノ原）

この遺跡は、平成８年11月から平成９年４月まで調査された遺跡である。熊本県住宅供給公社の造成工事に先立つ調査で約4,000㎡を調査した。

その結果、遺構としては多くの竪穴遺構が確認され、そのうち19軒は竪穴住居跡であった。住居跡は何回か立替えた跡があり、数世代住んでいた可能性がある。時期は一緒に出土した土器から考えて、縄文時代晩期始め（今から3,500年前）のものと考えられる。

出土した遺物としては、土器や石器が多くを占めるが、非常に特殊なものとして土偶、石棒、注口土器などがあった。土偶は３体出土している。なかでも１号土偶は、残りがよく、頭が欠けているだけでほぼ全体の様子が分かった。石棒は石斧のような刃を持ち、頭部には文様が掘り込んであった。注口土器は土壙から出土したもので、ほぼ全体が揃っていた。これらのものは、当時の人々がお祭りに使った道具と思われ、縄文時代後・晩期の人々がこころの中で何かイメージしながら作り出したものであろう。　（坂田　和弘）



◀空から見た鶴羽田遺跡

◀1号住居跡の検出状況

▲石棒出土状況

◀土偶出土状況

▲注口土器出土状況

弥生時代

旧石器時代～江戸時代

弥生

ぬきや遺跡

（阿蘇郡西原村大字宮山字多々良）

阿蘇外輪山の南側の緩やかに傾斜する標高290m前後の台地上に位置しており、南側約200mに木山川が流れている。

発掘調査では、ローム層中から旧石器時代の剥片類が11点、その上層から縄文時代早期である押型文土器が多く出土した。出土した押型文土器は、山形文を縦方向に回転施文し、やや外反した口縁部内面には山形文のみを横方向に回転施文させるという共通性をもっている。このような特徴から押型文土器群の中でも比較的後半期のものと考えられる。

また、古墳時代の住居跡（5世紀後半）が調査区の西側隅から2軒検出できた。しかしながら調査区の隅での検出であり2軒の住居跡とも完掘することができなかった。

さらに、江戸時代の後半期のものと考えられる幅2m深さ2mほどの南北に伸びる水路（井手）が確認できた。西原村では江戸時代の後半期に多くの新田開発が行なわれており、この水路状遺構もそれらに伴うものと思われる。

（小谷　桂太郎）

◀古墳時代の住居跡

◀江戸時代水路状遺溝

神水（くわみず）遺跡【11次調査】（熊本市神水本町1-45）

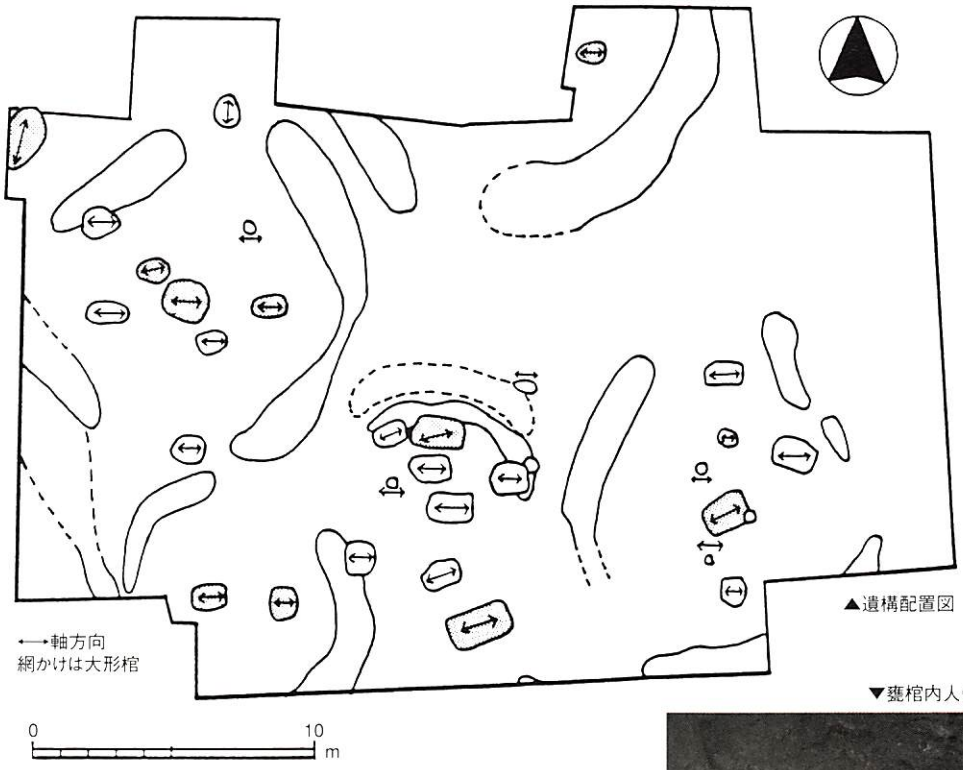
弥生時代中期

本遺跡は、熊本平野に向かって突出した台地の先端部に位置していて、過去に弥生時代中～後期の竪穴住居跡群や甕棺群が出土している。

今回の調査で出土した主な遺構は弥生時代中期の甕棺墓群で、竪穴住居跡など生活跡は見つからず、主に墓域として使用された空間のようであった。検出された甕棺墓31基で、５つのグループからなり、それぞれ大形の甕棺（須玖式）を中心に、黒髪式などの中小形の甕棺で構成されていた。さらに、それぞれの甕棺群は溝状遺構で囲まれ、墓域が区画されていた。

甕棺群内の主軸方位はほぼ同じ方向であったが、頭位は一定ではなかったようである。これらのうち、10基に人骨が残っており、その内訳は成人８体、小児２体であった。調査時での所見ではすべて女性であった。溝状遺構からは赤い顔料で彩色した完形に近い壺形土器が出土した。その数は、一つの溝に対して１ないし２個の割合で出土している。

（金田　一精）



▲遺構配置図

▼溝で区画された甕棺群

▼甕棺内人骨出土状況

前原長溝遺跡（玉名郡菊水町大字原口）

まえばるながみぞ

弥生時代中期

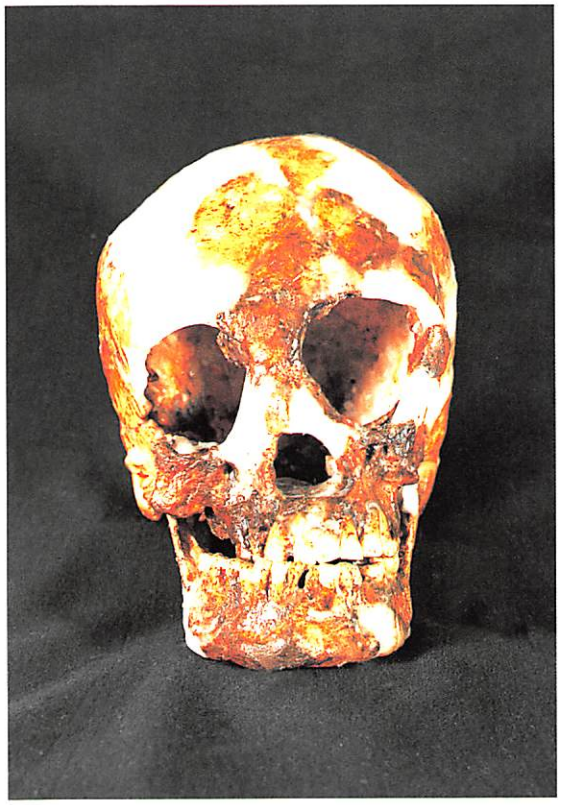
当遺跡は、九州自動車道本線と同菊水料金所の間に南北に伸びた舌状丘陵（諏訪原台地東西400m・南北800m）の北端に位置する。発掘調査では、条溝を巡らせた自然墳丘墓が見つかり、また祭壇と思われる壇上遺構を確認、弥生時代中期の甕棺（大形甕・小形甕・壷形甕）21基を調査し、弥生人骨４体を検出した。

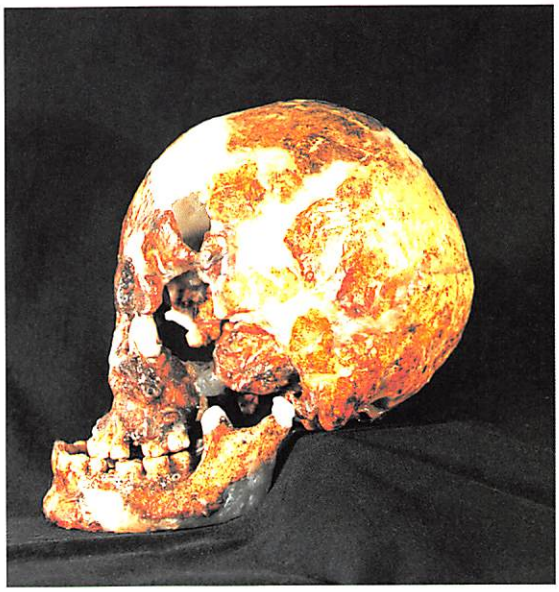
（益永　浩二）

▲弥生時代の墳丘墓
遺跡は、舌状丘陵上の小高い丘になっており、条溝が墳丘を取り囲まいていた。

◀弥生人骨
21基出土した甕棺のなかで4体の人骨が残っていた。後世の撹乱を免れ保存状況が良かった。

▲甕棺／遺跡では大小の甕棺と壷棺が出土した。





人工変形頭蓋 ▲▶
1体の女性人骨から頭や顔を人為的に変形された頭蓋骨が見つかった。

五丁中原遺跡群【第1次調査】

（熊本市貢町・和泉町）

旧石器時代～中世

この遺跡は、金峰山から西へ延びた丘陵の先端部に位置している。調査は、食品工業団地「フードパル」の建設に伴うもので、調査面積が約35.000㎡に達する大規模なものであった。

広大な調査区内からは、旧石器時代から中世までの多種多様な遺構・遺物が出土している。特に注目されるのは弥生時代後期の環濠集落と古墳時代中期の古墳群である。

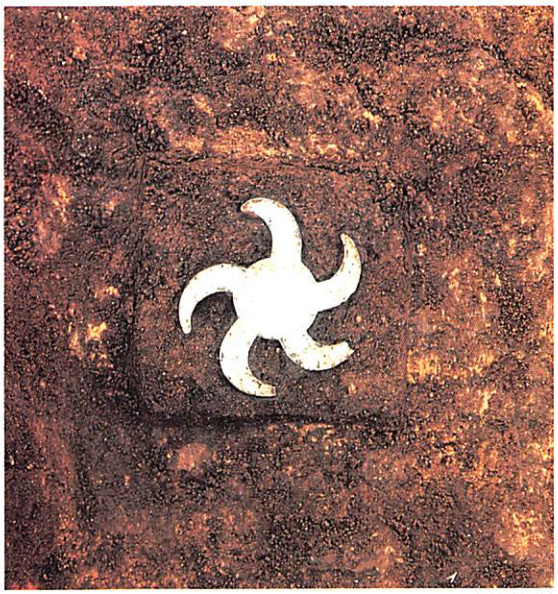
環濠集落は、壕に囲まれた範囲が少なくとも40.000㎡を超す大規模なもので、竪穴住居跡群、掘立柱建物３棟が検出されている。巴形銅器、小型仿製鏡、銅鏃がいずれも竪穴住居跡から出土している。一方、古墳群は４世紀末から５世紀代にかけてのもので、方形周溝墓→大型円墳→中小型円墳への変遷が明らかとなった。３号墳の周溝底から掘り込んだ墓壙からは壮年の女性人骨が出土していることから、この女性と古墳の主である被葬者との関係が注目される。

その他の遺構・遺物としては旧石器時代の石器、縄文時代早期の集石跡・炉穴跡、後期の竪穴住居跡、弥生時代中期の甕棺墓群、歴史時代の竪穴住居跡群、中世の掘立柱建物跡群などが検出されている。

（山下 宗親・金田 一精）

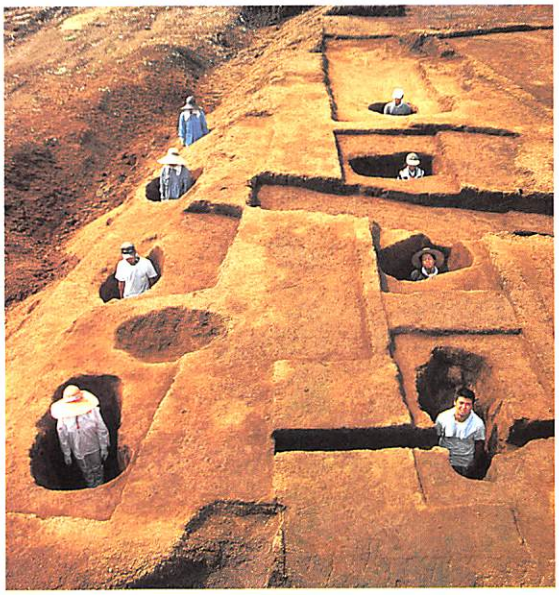
▲空から見た五丁中原遺跡

▲小型仿製鏡



▲巴形銅器

▲環壕跡



▲掘立柱建物

▲3号墳

▲3号墳周溝内墓壙

梅ノ木遺跡（菊池郡菊陽町津久礼）

弥生時代中期～後期

この遺跡は、白川中流域の右岸に位置し、弥生時代中期から後期にかけての集落跡と墓地であることが明らかになった。集落の範囲は東西、南北ともおよそ100mを超すものと推定され、1982年以降二度の調査により、竪穴住居跡が200軒以上確認されたが、後世に失われたものを加えると300軒以上あったと考えられる。また、住居の重複や住居そのものの耐用年数から推定すると、一時期20軒前後からなるムラが営まれていたらしい。

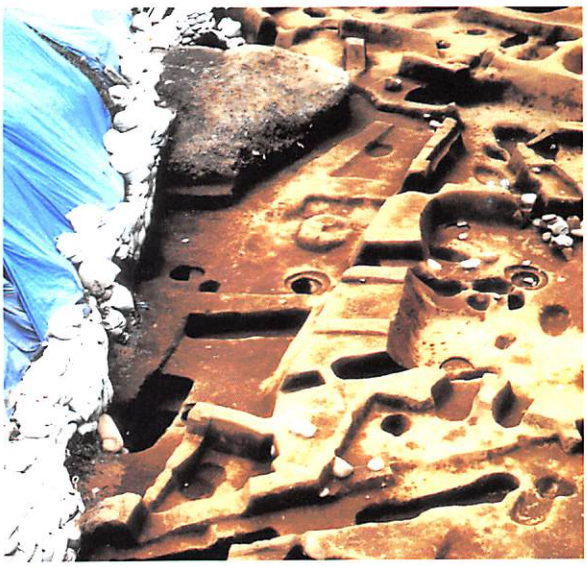
一方、墓地では集落の北側と東側及び南側に甕棺・壺棺・土壙墓が、また東側と西側には木棺墓が検出されたが、とくに東側には50基以上の墓が集中していた。

出土遺物としては、石包丁・砥石・石皿・石鏃をはじめ、柱状片刃石斧や抉入片刃石斧などの大陸系石器、さらに鑿や鉈などの鉄製工具や手鎌・鎌さらに鋤などの鉄製農具がある。このような鉄製品の出土数はほかの遺跡に比較して特に豊富である。なかでも鋳造鉄斧を再加工した鑿状鉄器は注目される。

（亀田　学）

▲遺跡の一部を上から見た写真　写真の上側から右側にかけて白川が蛇行して流れている　距離にして70m程離れている。

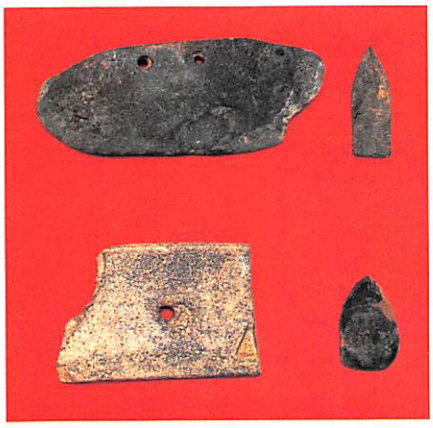
▲竪穴住居跡は一辺が4～5mの四角い形が一般的。柱は中心となる4本の柱と補助的な2本の柱を持つ構造のものが多いようである。竪穴部の復元の高さは1mを超えている所もあった。



▲一辺が10mを超える竪穴住居跡の北半分。作業場・集会場や倉庫などに使用されたと思われる。暖をとったり煮炊きをする炉は住居の中央付近にあるほか屋外に持つものも見受けられる。

▲壷棺・甕棺は小形及び中形（40～80cm）であり、子供を葬るか遺体が骨になってから壷棺・甕棺に再葬したかが想像される。

▲木棺を埋葬した墓と推定され、木棺材や人骨のほとんどは腐食して無くなっていたが足の骨の一部が残っていた。



▲出土した石の道具類。左側が石製穂摘み具で稲の穂首を刈る道具。右側は磨製の石鏃（矢じり）。

▲出土した鉄の道具類。左の2つは鉄鏃、中央が鉋（木を削る道具）。右は板状鉄斧。

白藤遺跡【第6次調査】（熊本市島町）

弥生時代中期～中・近世

本遺跡は、白川により形成された自然堤防上に立地する遺跡である。現在は平坦な地形であるが、弥生時代においては自然流路に囲まれた微高地が点在していたと考えられている。これまでに弥生時代の甕棺墓・住居跡、古墳時代の周溝墓などが検出されている。

今回の調査は熊本市の区画整理に伴うもので、中近世の井戸・土壙・溝のほか、弥生時代中期の墓地・集落、後期の集落などが検出された。出土遺物として、弥生時代では弥生土器・石器・甕棺などが、中近世において陶磁器・木製品・石製品・動物遺体が大量に出土した。特に注目される遺物として、青銅器鋳型と銅矛があげられる。青銅器鋳型は縦7.7cm、横8.3cm、厚さ2.4cm、石材は石英―長石斑岩で、熊本県で初めての出土である。青銅武器の切先部分にあたり、その裏面には湯口らしき彫り込みが見られる。

銅矛は現在長4.1cm。全体を復元しても10cmに満たないような超小型品である。これら銅矛と鋳型の出土は、熊本平野における青銅器生産の可能性を示唆するものと考えられる。

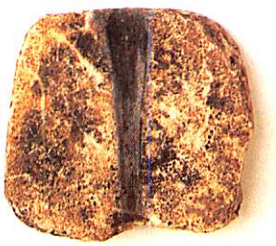
（林田　和人）

▲発掘調査風景

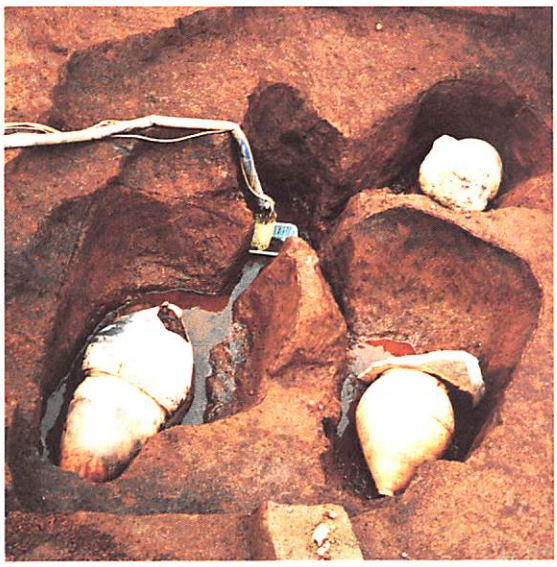
▲Ⅳ区21号
土壙出土銅矛

▲表面：切先

Ⅳ区P　130出土鋳型



▲裏面：湯口か?



▲甕棺出土状況　甕棺は3～4基で1群をなし、大型棺と中型棺で構成される。

▲Ⅲ区39号土壙（土壙墓）土壙墓は多様な埋葬姿勢をとっている。

◀Ⅳ区20号土壙
土壙の中央に穿孔した甕を倒置する。甕の下にはピットがあるが中から遺物は出土しなかった。甕の脇から人骨片が出土しており特異な埋葬方法といえる。いかなる理由によるのか全く不明である。

▲Ⅱ区27号土壙出土馬　牛・馬などの動物遺体が6体検出された

▲Ⅱ区5号井戸　井戸側に曲物を使用し3段重ねてあった。

方保田東原遺跡（国指定史跡）

（山鹿市大字方保田字東原）

縄文時代～中世

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。昭和48年の調査で当時県下初の巴形銅器を出土したところから遺跡の重要性が確認された。昭和56年宅地開発の危機に瀕したが、国指定史跡として遺跡の一部を保存することができた。（昭和60年２月19日指定）

遺跡は、菊池川右岸の標高34mの河岸段丘上に位置し、遺跡の南側は菊池川、西と北は方保田川に挟まれた舌状台地をなしている。調査では、縄文時代から古代、中世の遺構や遺物も発見されているが、主体は先に述べた弥生時代後期から古墳時代前期である。

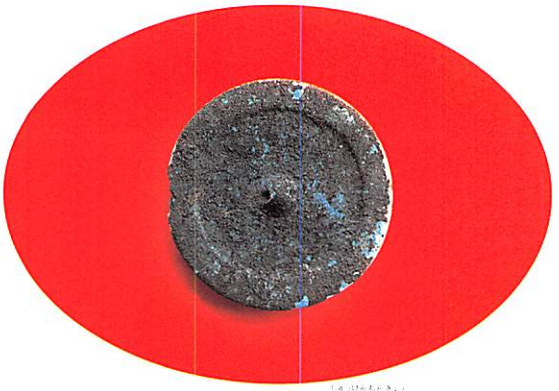
遺物としては青銅器が数多く出土しており、巴形銅器１点、舶載鏡２点、小型仿製鏡４点、銅鏃６点を数える。県下で最も多くの多くの青銅器が出土する遺跡として注目されるが、遺跡の全容は未だ明らかにされていない。

（中村　幸史郎）

▲遺跡全景
川に挟まれた台地全体に遺跡が広がるものと推定されている。

◀平成７年度調査全景（出土文化財管理センター建設予定地）
舌状台地の基部を断ち切るように大溝（左側）が確認された。

▲平成8年度調査出土の内行花文鏡直径7.8cm
鋳上がりが悪く、文様がきわめて不鮮明である。

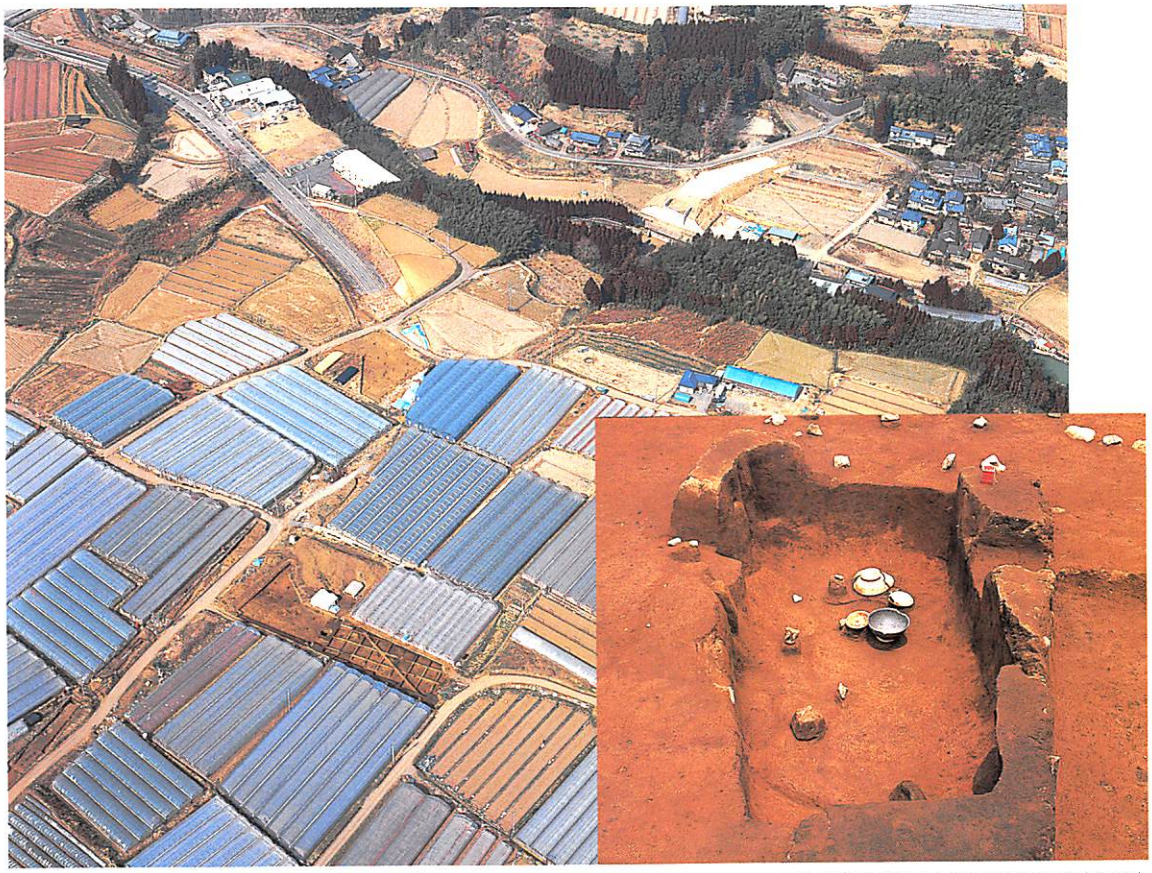


▲平成9年度調査地出土の重圏文鏡直径8.1cm
鈕には紐が残っており鋳上がりがよい。

ヲスギ遺跡

（鹿本郡植木町大字滴水字ヲスギ）

今回の調査の結果、縄文時代早期の集石遺構を検出し、弥生時代後期には集落の縁辺部だったことが確認された。平安時代の土壙墓、木棺墓も数基ありその中の一基から県内初出土の黒色土器托状椀などの土器類、手斧、火打鉄、金銅製品が出土した。出土遺物は10世紀末頃のもので、いずれも宗教色が強く、当時としては希少な高級品であり、地域の有力者の持ち物であったと考えられる。塔ノ本遺跡や後代の那智や円台寺地域などとの関係が注目され、平安時代初めから中世にかけて轟、滴水一帯が非常に発展していた様子を垣間見ることができる。（中原　幹彦）



▲遺跡全景（南から）画面左方向が弥生時代後期の集落。

▲多くの遺物が出土した5区1号木棺墓（南から）
長さ2.1m、幅0.8m、深さ0.5m。
頭位は北向きである。

▲ナゾの金銅製品

▲ 木棺墓出土土器　合子状の小皿がある。

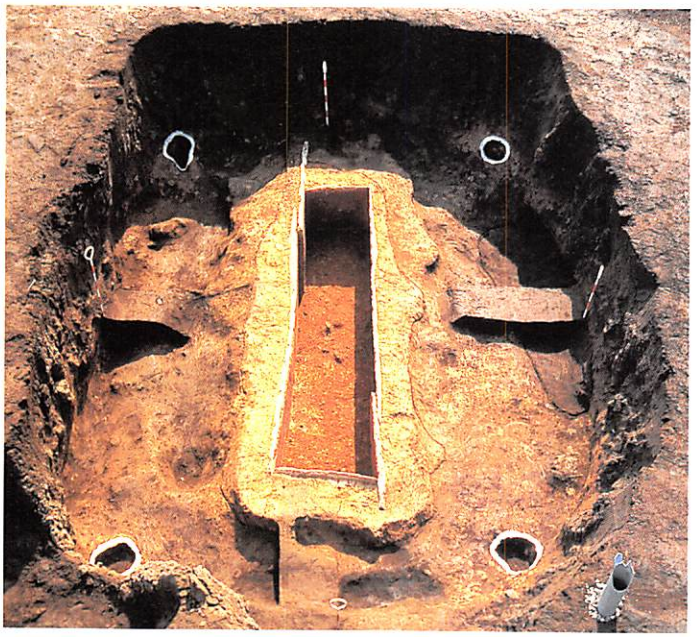
水源地遺跡【第3次調査】（熊本市水源地1-1）

古墳時代前期

―周溝墓の主体部から柱穴を確認 / 周溝墓の主体部に刳抜式木棺を使用―

江津湖を臨む台地縁辺に展開する周溝墓群である。約1,900㎡の調査区において4世紀末から5世紀前半の周溝墓群8基・土壙墓1基・同時期の住居跡1軒を検出した。周溝墓は、方形が古く、円形へと移行している。住居跡は、周溝墓群中に単独で存在しており、鼓形器台ほか供献土器が多く出土している。墳墓の築造や葬送儀礼に関わる施設と考えられる。

（美濃口 雅朗）

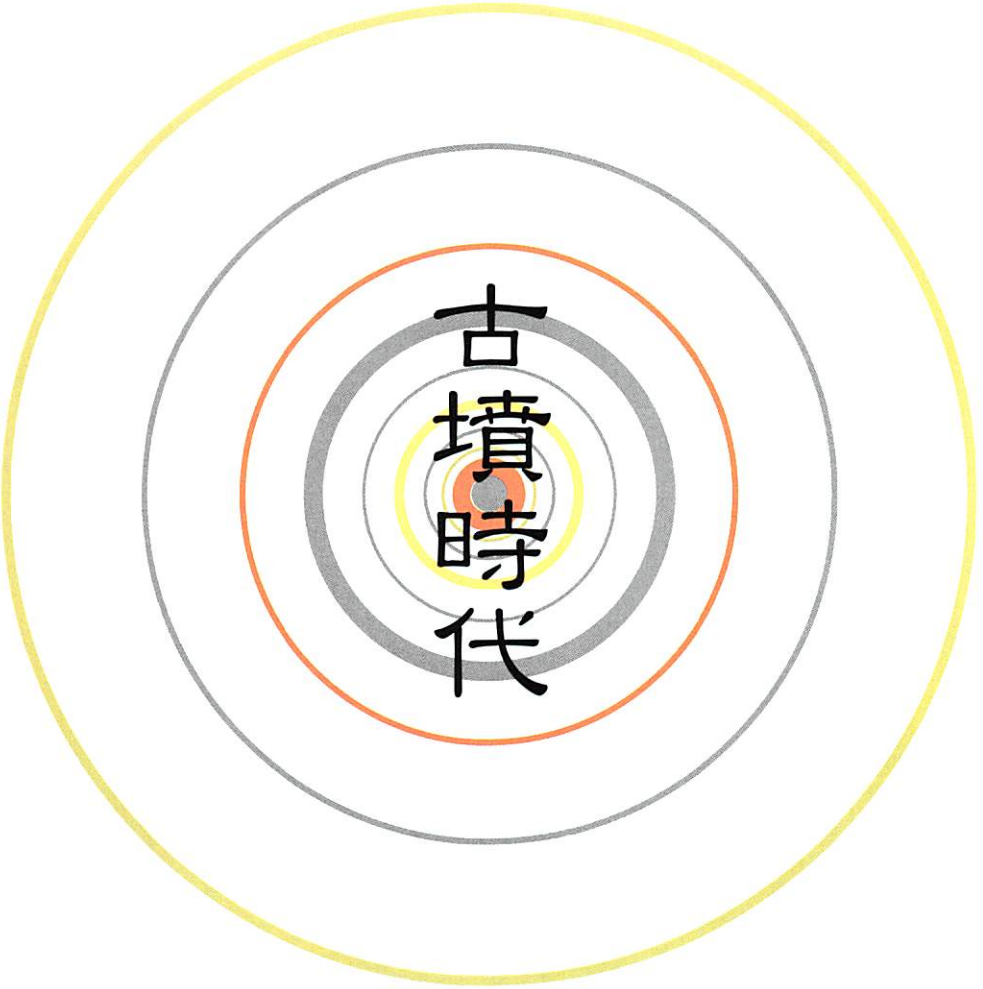


▲円形周溝墓主体部掘り込みの四隅に杭状の柱を立てた痕跡が確認された。墳頂部の空間を区画したものであろう。柱は死霊が天へ昇るための道筋を示すためのものであったり、死霊の帰る依代として機能したとする考えがある。それとは別に、墳頂部に簡易な建物があったと考えることもできる。

主体部埋土中からは、築造時に石棺上面の高さを揃えるために調整を行なった際の石屑、調整具に使用した敲石が出土している。

▲追葬時に小形仿製鏡（素文鏡）、刀子を副葬している。

▶円形周溝墓の主体部に刳抜式木棺を用いる。舟形を呈し両端に突起の痕跡を認める。木質部は腐植している。


古墳時代

柳町遺跡（玉名市河崎）

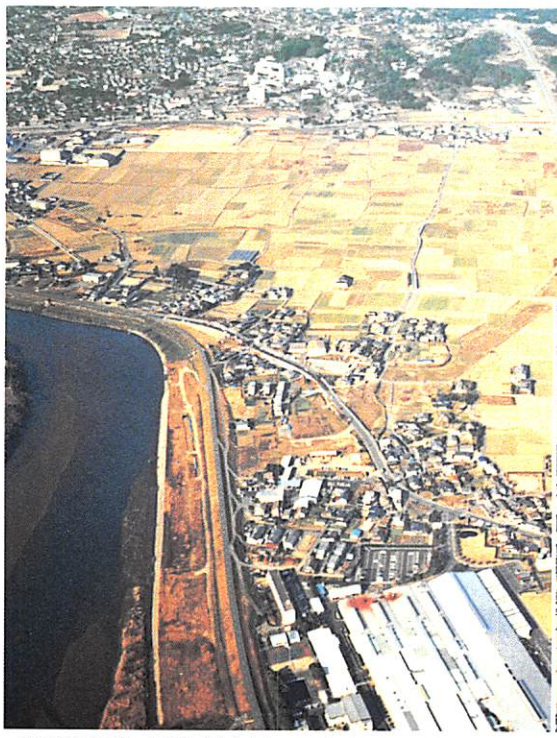
弥生時代末～平安時代初頭

―菊池川隣接の「津」（大拠点集落）か―

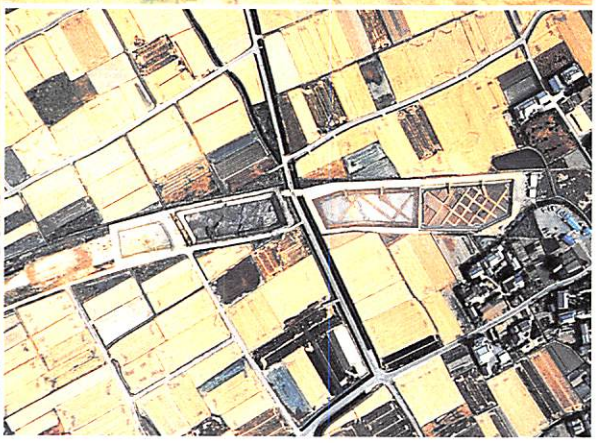
玉名平野中央の標高６ｍの低湿地に位置する。国道バイパス建設にともない平成６年度からの４次にわたる調査で、弥生時代末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡９軒、井戸跡10基、環壕１条、掘立柱建物２棟、区画溝３条、水田跡１期相当分などが確認され、1,300点にも及ぶ多様な木製品や破鏡、土製模造品などが出土した。

また、奈良時代末から平安時代初頭時期では敷葉工法の大型土塁１基、くり抜きとせいろ組を併用した井戸跡１基、大型井泉１基、掘立柱建物群などが検出されている。これらの遺構は官衙と隣接した集落域であった可能性が強い。

特筆される出土遺物として古墳時代初頭の２領の木製短甲があり、地域性を持つ１号短甲の附属棒状留具からは「田」の文字が確認された。それは小径の椿材に周りからは見えない箇所に１字づつ独立した５字相当分の一文字であり、いずれも有機系の染料で書かれていた。日本における文字受容の初期の状況を示す貴重な資料でもある。　（高谷　和生）

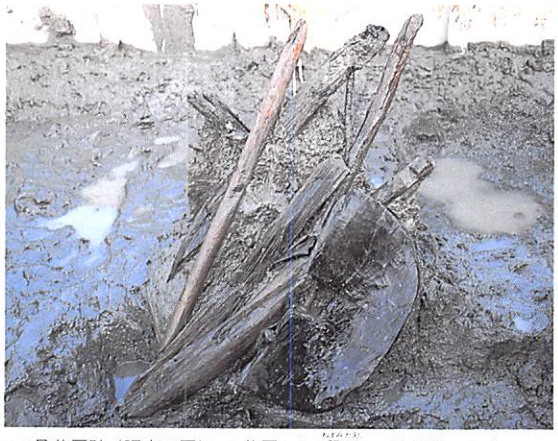


▲調査地の遠景　玉名平野中央部に国道バイパス建設が予定されており、遺跡は菊池川の後背地に立地する。



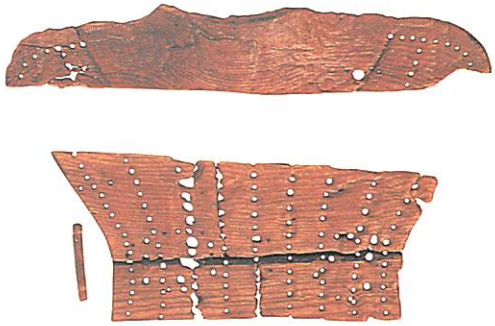
▲各調査区の様子　微高地上には集落が位置し、周辺には多くの流路が見られる。

▲鳥形木製品と平鍬2　調査Ⅱ区の流路からは破棄された木製農具などが多量に出土した。



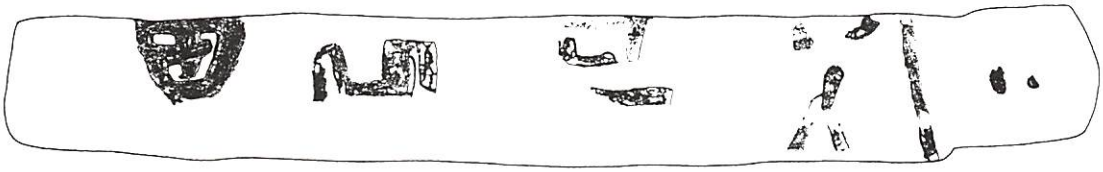
▲4号井戸跡（調査Ⅳ区）この井戸からは鼠返しや建築材が出土した。

▲1号木製短甲の出土の様子（調査Ⅰ区）
この2号井戸跡は出土した土器から4世紀初頭の時期と推定される

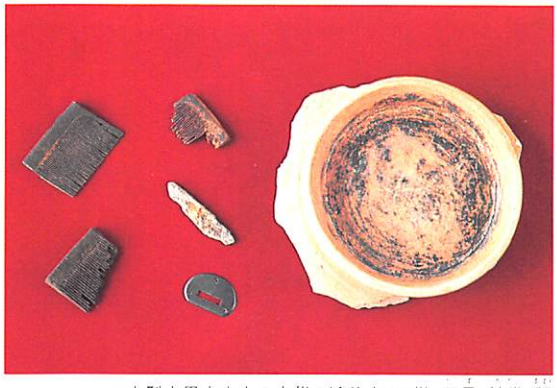


▲1号木製短甲と附属棒状留具（表側）
表面には皮綴じのための小孔列が縦方向に9列見られ、留具は背中中央部上下材の間に留められる

▲棒状留具（裏側） 長さ7.8cm幅1.1cm最大厚0.9cm

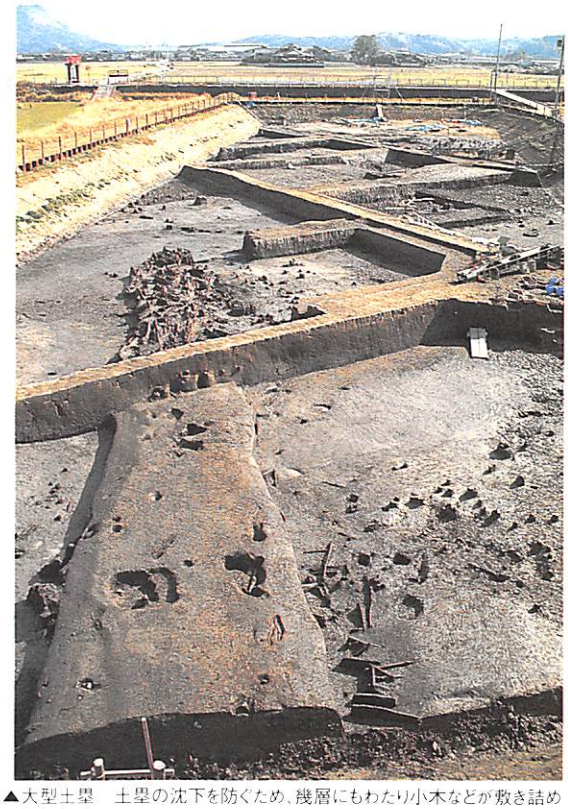


▲棒状留具の文字 左端の文字を「田」と読め、ほかに判読できない4文字相当がある



▲大型土墨内出土の古代の遺物左より櫛、刀子、袴帯、硯

▲16号井戸（調査Ⅶ区） 径80cmのくり抜いた楠木を本体とし、クヌギ材のせいろ組井戸枠も併せて使用されてた



▲大型土墨 土墨の沈下を防ぐため、幾層にもわたり小木などが敷き詰められていた

古墳時代前期

上松山遺跡（宇土市松山町2741番ほか）

かみまつやま

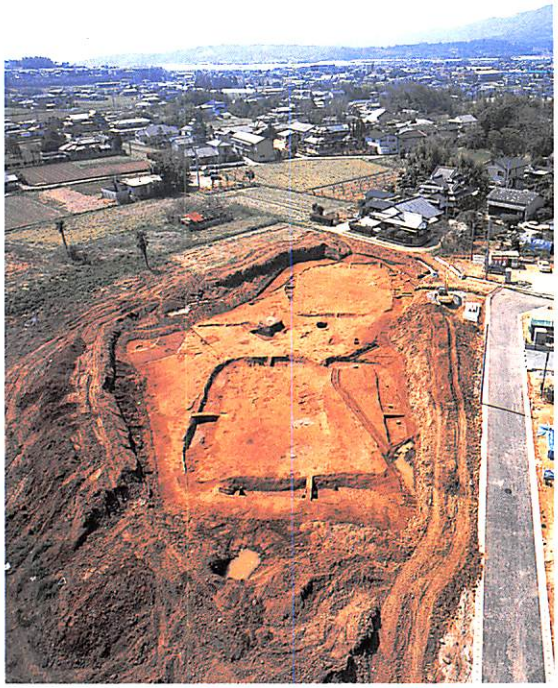
宇土半島基部の東側、前期古墳に属する前方後円墳が立地する丘陵の北側に広がる標高約10mに位置する。1997年春と秋の2次にわたる宅地開発に伴う調査で、4世紀後半の古墳時代前期の方形周溝墓6基を宇土半島基部で初めて確認した。

方形周溝墓は、大きいもので一辺約23m、幅2～4m、最も深いところで1.5mの周溝を巡らすが、一方、小さいものは一辺約15mのものまで確認されている。

主体部には石棺を置きその石棺の密閉に使用した白色粘土や、棺に塗られた赤色顔料が残っていた。周溝からは、土師器の壷・甕・高杯ながど多数出土した。4号方形周溝墓の周溝からは、赤色顔料を入れた土師器の壷と甕が出土している。また、3世紀の後半のものと思われる竪穴式住居跡4棟も確認されている。

今回の調査結果は、宇土半島基部の古墳時代研究において、当時の社会的地位に応じた埋葬方法を理解するうえで重要なものといえよう。

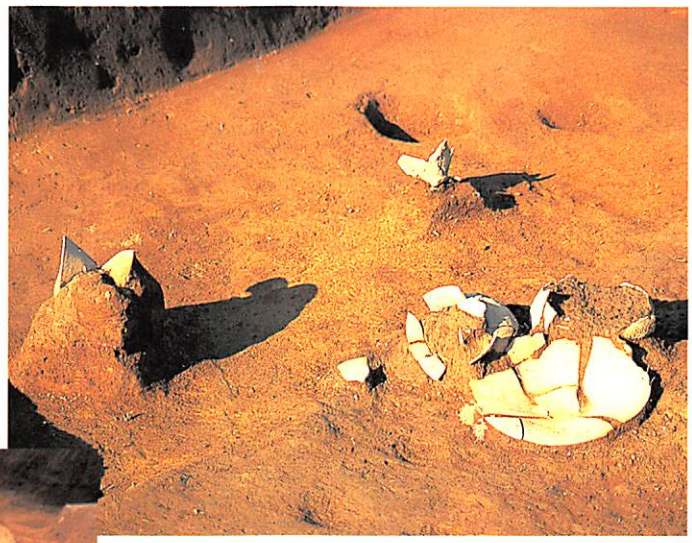
（木下　洋介）



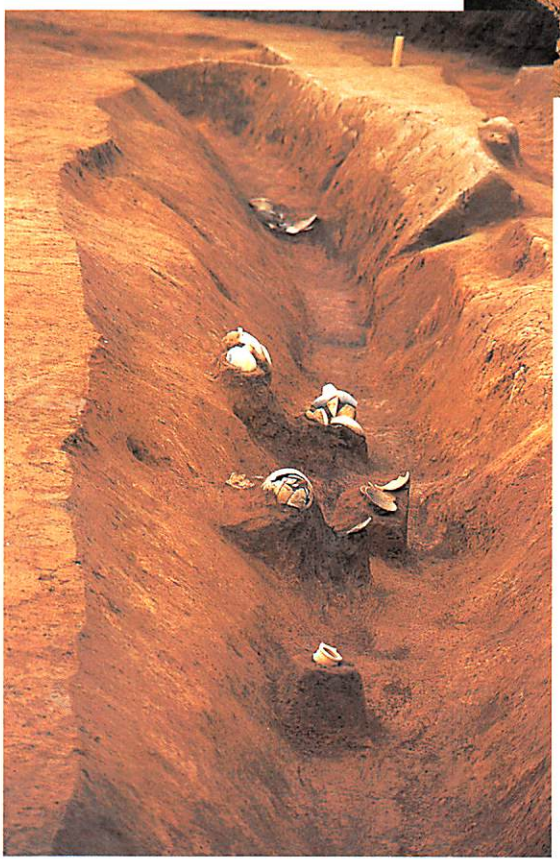
▲空から見た上松山遺跡（第1次調査）

▲2次調査空中写真（上部宅地分は1次調査区）

▲4号周溝墓（中央の主体部石棺は抜き取られていた。）



赤色顔料を入れた土師器▶



◀周溝からの遺物出土状況

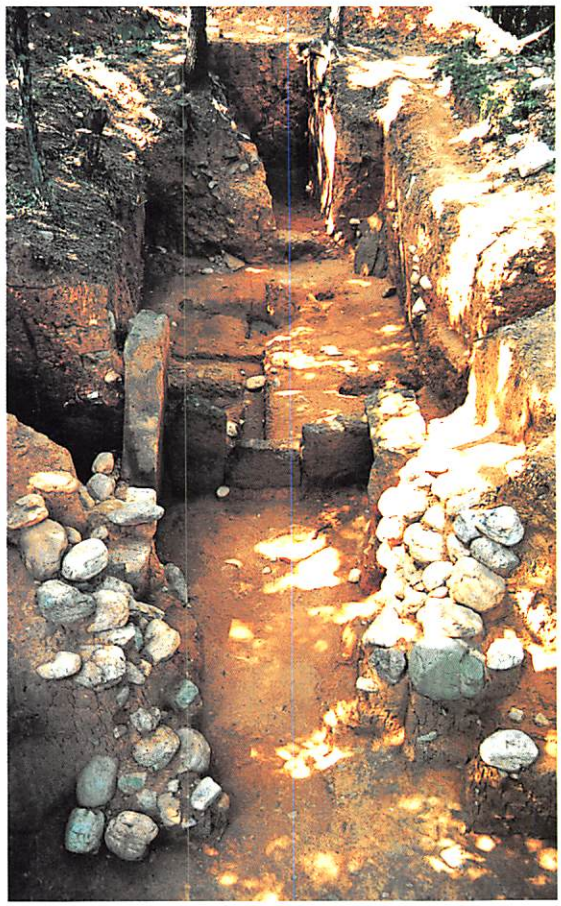
▲竪穴住居跡から出土した土師器

古墳時代後期

物見櫓古墳（八代郡竜北町大字野津字下北王146）

物見櫓古墳が属する野津古墳群は、全長64mから99mの前方後円墳4基からなる6世紀前半から中頃の古墳群で、標高約100mの丘陵上に位置する。その中で当古墳は西に突き出た尾根上に位置し、全長約64m・高さ約7mで、4基中最も小規模な古墳である。

出土遺物は、耳飾のほか、須恵器・土師器・鉄製品・玉類などがあるがいずれも原位置を保ったものではなく、羨道部の埋土中から出土したものである。耳飾りの形状は金線を円形にした耳環と、金の粒を取り付けた中空の垂飾を二重の兵庫鎖でつないだもので、長さ6.2cm・重さ約15gの金製である。金製垂飾付耳飾は朝鮮半島系の装身具のひとつであり、物見櫓古墳出土のものはそれらに良く類似している。（今田　治代）



石室は、南東に開口する▶
複室の横穴式石室

▲空から見た、物見櫓古墳（右側が、後円部）

▲金銅製垂飾付
耳飾り

迎原西遺跡（下益城郡城南町大字沈目・下宮地）

弥生時代後期～平安時代

遺跡は沈目・下宮地地区に所在する大規模な集落跡で、標高28～30mの丘陵上の南側斜面に位置している。推定面積は36.000㎡に及ぶ。戦後まもなく小林久雄氏によって調査され、弥生後期及び古墳時代中・後期の土器等が出土している。特に免田式土器が多数出土したことから、研究者の間で注目された遺跡である。平成6年には、宅地造成に伴う調査（約3.000㎡）が行われ、弥生時代後期、古墳時代中後期の竪穴住居跡52基、平安時代の掘立柱建物跡1基などが検出された。

特筆すべき遺構としては竈付きの竪穴住居跡で、出土した土器の観察の結果、5世紀前半のもので、同種の遺構としては、県内最古のものであることが明らかになった。出土遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器のほか、石包丁・摘鎌・鉇・鉄鏃・鉄斧などの利器、検出例の少ない焼成粘土塊（土器作りのための粘土塊が焼けたもの）などがある。

（清田　純一）

▲空から見た迎原西遺跡

▲県内最古の竈

▲県内最古の竈付の住居跡の検出状況

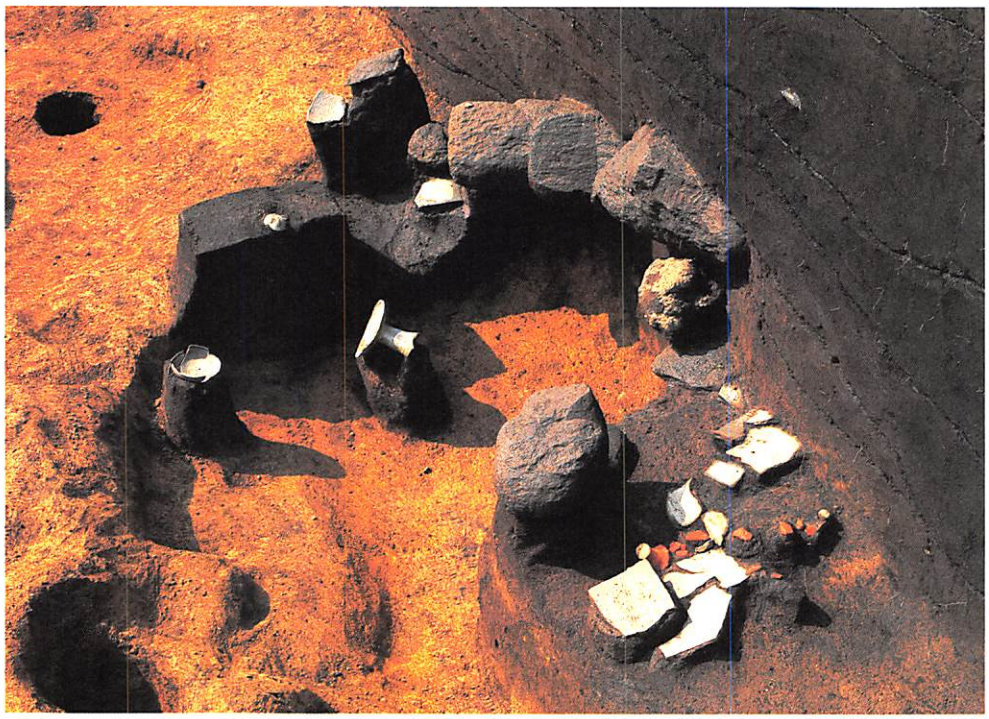
古墳時代後期

木柑子高塚古墳（菊池市木柑子1045-1番地）

この古墳は、県営圃場整備事業に伴い熊本県文化課により調査が行なわれた。古墳の周溝内より4体の石人が出土したが、発掘調査によってこのように4体も石人がまとまって出土するのは全国的にも初めての例である。周溝内からは須恵器や馬具なども出土していて、これらの遺物からこの古墳の築造年代は6世紀後半の頃と推定されている。

古墳の墳丘部分は、畜舎が建てられていたため、古墳の全容を明らかにすることは出来なかったが、周溝の部分的な調査にも係わらず、この古墳が前方後円墳であった可能性が強まった。これまで、いわゆる石人・石馬の文化は5世紀代を中心に盛行するものと定説化されていたが、今回の調査例のように6世紀後半の段階に至っても、古墳に石人を樹立する習俗が残されていたという事実は、この地域の古墳文化の在り方を考えるうえで、極めて注目すべき調査成果であったと考えられる。

（古森　政次）



▲石人1出土状況（北より）

▲石人出土状況（南より）

調査区完掘▶（西より）

▲石人・1　貴人

▲石人・2　巫子

▲石人・3　裸婦

▲石人・4　仮面をかぶった伎人か?

古墳時代中期

小塚古墳（こづか）

（玉名郡天水町大字部田見）

小塚古墳は道路整備に伴い平成８年度12月２日から平成９年３月18日にかけて天水町教育委員会によって発掘調査が実施された。

金峰山系の山並みから連なる丘陵上にあり、その北側に経塚古墳が隣接しているため、古くから前方後円墳あるいは経塚古墳の陪冢（ばいちょう）と考えられてきた。

しかし、今回の調査で小塚古墳に伴う周溝を検出することができたため（写真の上側の白線で示した溝は不明）、両古墳はいずれも独立した古墳であることが明らかになった。小塚古墳の周溝内からは、４世紀末から５世紀初頭の所産と思われる複合口複壺のみが出土し、その外側の溝からは複合口複壺・円筒埴輪が混在して出土していることから、墳丘に埴輪列が樹立された、往時の姿が窺えるようである。

（中川　裕二）

▲小塚古墳（写真左手は経塚古墳）

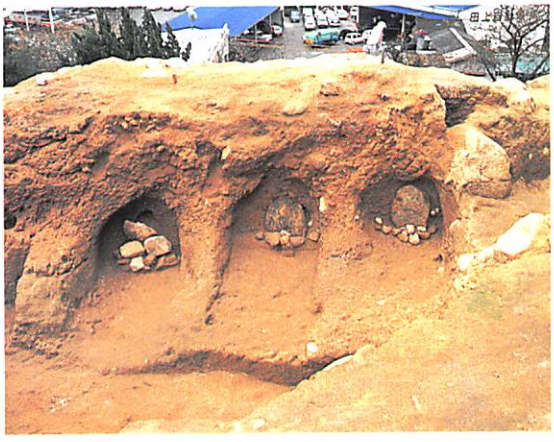
つつじヶ丘横穴墓群（熊本市黒髪7-577）

―前庭部を共有する複数の横穴墓群―

白川中流域右岸、立田山東南麓斜面に立地する6世紀後半から7世紀後半の横穴墓群。調査面積は5.670㎡。周辺には、発見経緯から名称が異なるものの、本来は一連のものと考えられる横穴墓群が、さらにその周辺には、小古墳が点在している。現在、保存整備を前提とした調査を断続的に行なっている。

本横穴墓群は、長大な前庭部をつくり、その壁面に複数の墓室を穿つという特異な形態を持つ。これは、立地環境が緩傾斜地であることに加え、狭い場所に効率的に造墓を行なった結果とみられ、同時に被葬者間の結びつきを示すものと考えられる。また、盗掘を受けていないことから、埋葬行為・墓前祭祀など当時の葬送儀礼を復原するうえで格好の資料を提供している。現在までに18群49基が確認されている。

（美濃口 雅朗）



◀最終閉塞時に祭祀を行なっている

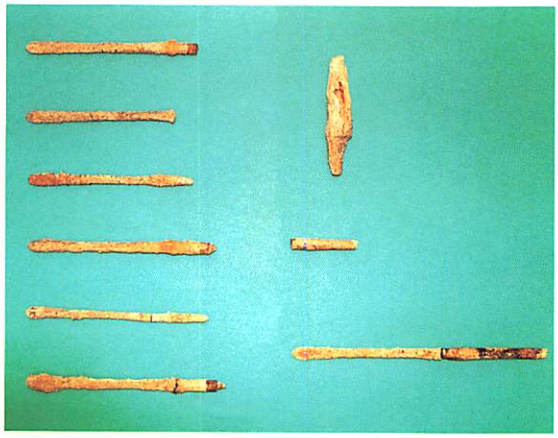
古墳時代後期

荻迫横穴墓群（菊池郡西合志町大字合生字荻迫2704）

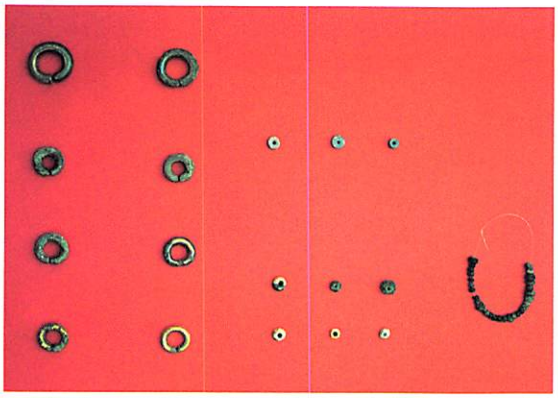
横穴墓群は、西合志町の北部で泗水町との町境に位置している。合志川の左岸に位置する洪積台地の北側崖面に築かれ、西側の台地上には黒松古墳群や塚口横穴墓群などが知られている。

今回の調査では、6基の横穴墓が調査され、墓室の構造はドーム形の天井で床面が平坦なものと家形の天井でコの字形屍床をもつ二種類のものが認められた。墓室内には、土砂が厚く堆積し、人骨は残存していなかったが、副葬品として金環やガラス小玉、土製丸玉、滑石製丸玉それに鉄鏃、轡などの馬具が出土し、前庭部からは墓前祭祀に使用されたとみられる土師器や須恵器の大型甕、壺、瓶、提瓶、高杯、杯など土器が多量に出土した。

横穴墓の築造開始時期は、出土遺物から6世紀の後半頃と考えられ、7世紀の中頃まで幾度かにわたって追葬や墓前祭祀がおこなわれたようである。（浦田　信智）



▲副葬品の鉄鏃と刀子　黒漆を塗った竹製と考えられる矢柄も残っていた。



▲副葬品の金環と様々な玉類　銅地に金メッキを施した耳飾り、それにガラスや土、滑石などで作られた玉類などの装飾品も出土した。

▲空から見た横穴群　台地の崖面に造られており、今回の調査で6基確認された。

▲横穴墓入口の閉塞石　安山岩の板石で墓への入口を塞いでいたのが判明した。

▲前庭部の遺物出土状況　墓入口付近からは、副葬品と考えられるたくさんの鉄製品が散乱した状態で出土しました。おそらく、追葬時に邪魔になったものを外に出したものと考えられる。

前庭部の遺物出土状況▶
墓入口付近で前庭部と呼ばれるところからは、墓前祭で使われた土師器や須恵器のいろいろな形の土器がたくさん出土した。

▲横穴墓から出土したいろいろな土器　墓前祭で使われた土器で、杯や高杯、瓦壷などたくさん出土した。死者に食物やお酒をお供えしたりするのに使ったものと考えられる。

古墳時代後期

瀬戸口横穴墓群（菊池郡七城町大字瀬戸口）

平成８年度調査区は、これまで確認されてきた横穴墓群のなかで最南端に位置し、13基を確認した。横穴墓の残存状態は、玄室の半分程度まで破壊されていたものがほとんどであった。

出土遺物は、鉄鏃・刀子等の鉄器、勾玉・管玉・ガラス製小玉等の装身具、馬具などがある。須恵器等の土器類は、ほとんど残されていなかった。

横穴墓の配置は、上下３段に配置されているように見えるが、築造当初から企画性のある配置を意識して築かれたものではないようである。天井部の形態や内部構造等からも各々の横穴墓に時期差が認められるが、おおよそ６世紀内に収まるようである。

なお、追葬の痕跡や、再葬に伴う玄室入口の拡幅等は確認できなかった。

（帆足　俊文）

▲瀬戸口横穴墓群全景

一ノ谷横穴墓群（熊本市津浦町6番地ほか）

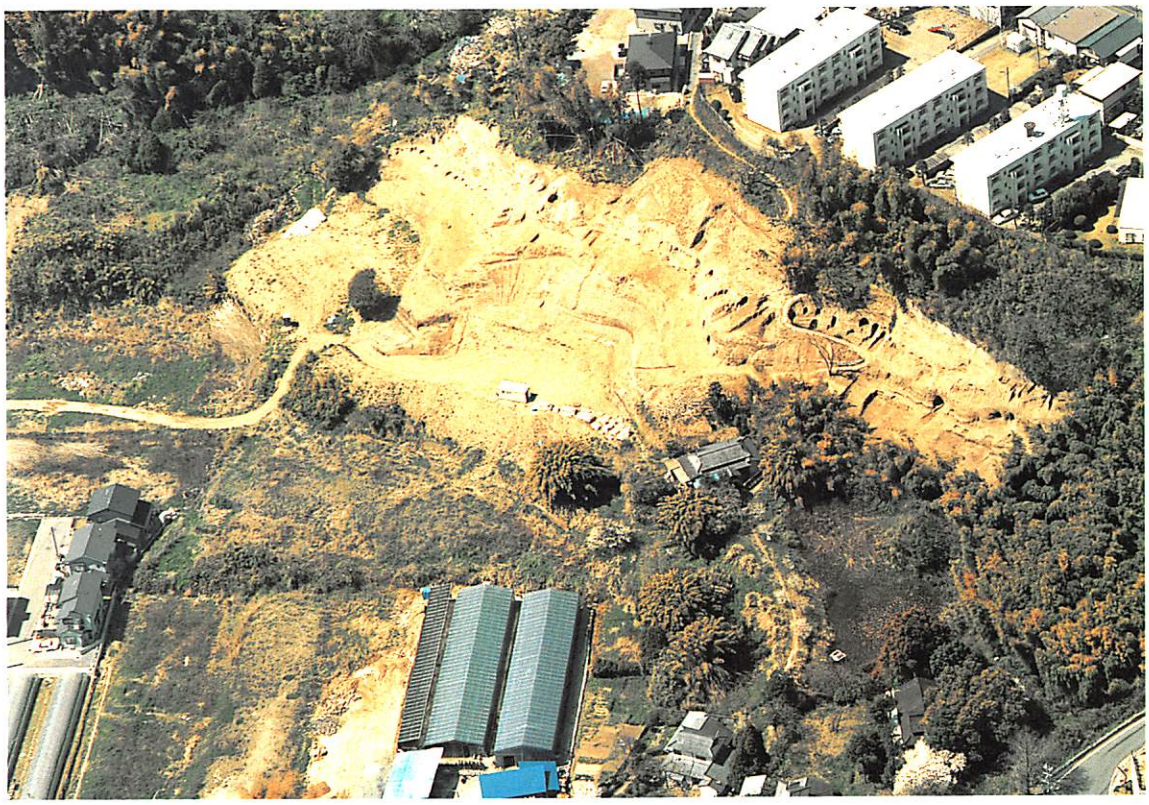
京町台地東側の標高30～35mの崖面に開口している横穴墓群である。

平成8年度にマンション建設に伴う発掘調査を行なった結果、7世紀代の横穴墓が104基確認された。ほとんどが防空壕などによって壊されており、未開口で残っていたのは3基だけであった。

なお、昭和40年代にも6基の横穴墓がされているが、いずれも戦時中の防空壕として使用され、詳しいことは分かっていない。

未開口横穴墓3基のうち1基からは3体の人骨が見つかり、副葬品として須恵器の大甕、無頸壺、鹿、丹塗りの台付長頸壺、耳環、メノウ玉などが出土した。特に、無頸壺は、外面に鉄釉と見られる黒褐色と緑色との球点状の文様が見られる。これまで、この種の土器（陶器）の出土例はほとんど無く今後出自を明らかにする必要がある。

また、調査した横穴墓のなかで46号横穴墓は、前庭部奥の大きな立石を置くという特異な構造で、立石の前には丹塗りの土器や壺が供献された状態で出土した。　（稲津　暢洋）



▲空から見た一ノ谷横穴墓群

▲46号横穴墓検出状況

▲無頸壺出土状況

古墳時代終末

椿原古墳（宇土市椿原町字金嶽783番地ほか）

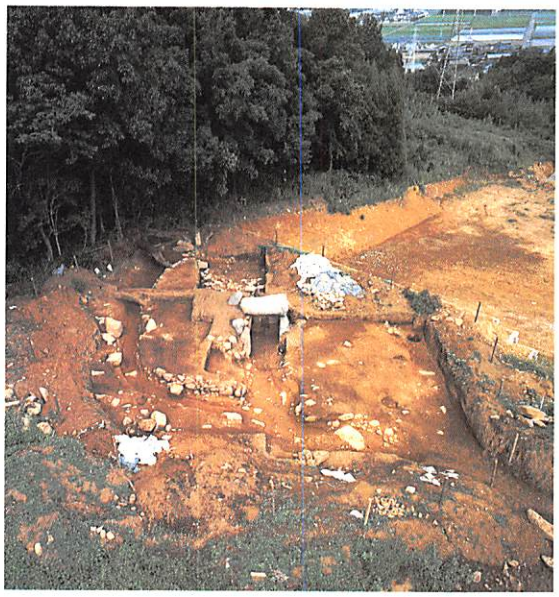
椿原古墳は宇土半島基部の西側丘陵南斜面、標高43mに位置している。1995年から96年の3次にわたる調査は宇土市教育委員会の依頼を受けた熊本大学考古学研究室が実施した。

椿原古墳19×18mの方墳で、墳丘に列石を巡らし、主体部は南西方向に開口する横穴式石室をもちには阿蘇ピンク石（阿蘇溶結凝灰岩）の刳抜玄門を用いている。

羨道部に線刻による装飾を持つ装飾古墳である。出土遺物は、周溝内から多くの須恵器が出土しているがその中でも高杯が非常に多く出土していることが注目される。

また、その築造年代は出土した須恵器から7世紀前半に比定される。このように終末期に属する方墳は、熊本県内では初めての発見であり、九州においても数例しか発見されていない。また、椿原古墳が存在する宇土半島基部は、古墳時代前期及び後期において前方後円墳が集中している地域であり、この地域に方墳が築造されたことはこの地方の古墳文化を知るうえで重要な資料といえる。

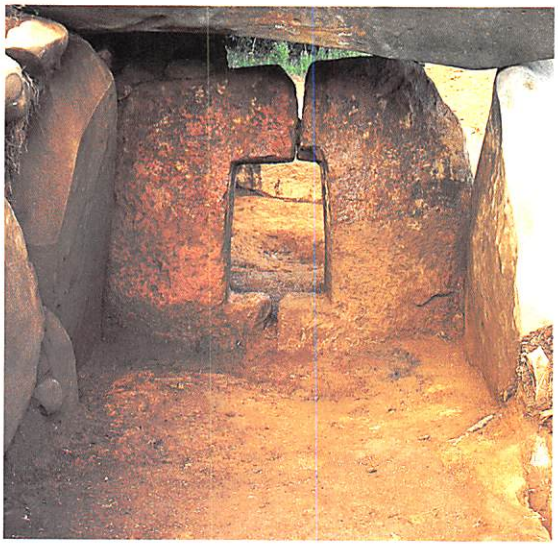
（木下　洋介）



▲空から見た椿原古墳

▼椿原古墳垂直写真

▲出土遺物

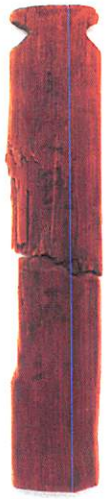


▲刳抜玄門

奈良・平安時代

鞠智城跡（鹿本郡菊鹿町大字米原・菊池市大字木野）

鞠智城跡の今年度の調査は第19次になり、これまでの調査により新しいことが少しずつ判ってきた。標高140m前後の米原の台地上には、建物跡が集まっており、現在までに、66棟の建物跡が確認された。これらは、掘立柱建物跡（素掘りの穴に柱を立てる建物）と礎石建物跡（土台の石の上に柱を立てる建物）とに大きく分けることができる。写真の上部に池跡が見えるが、池跡は朝鮮半島の古代山城では確認されていたが国内では初めての発見であった。　（西住　欣一郎）



▲池跡より出土した木簡で、これは税として納められ米に付けられた荷札と思われる。表面に「秦人忍□（米？）五斗」と墨で書かれ、古代山城での木簡の出土は国内初であった。

▲空から見た鞠智城跡

▲軒丸瓦（軒の先端に葺く丸瓦）の瓦当（文様のある部分）で、文様は子葉の無い花弁8葉を表現している。丸瓦と瓦当とは別々に作ってあり後で接合してある。半円の丸瓦と瓦当とを接合する特殊な接合方法であった。

▲池跡から見つかった建築材で、細くて束ねてあるものは壁の下地等に利用したものと思われる（径約5cm、長さ約2m）。大きくて長いものは桁材と考えられ（径約20～30cm、長さ約4m）、仕口（木と木と結合するための加工）が1本にある。これら建築材がこれほど保存状態が良く残っていたのは、池の水に現代まで浸っていたからと考えられる。

国分寺跡【第8次調査】（熊本市出水1丁目2-19）

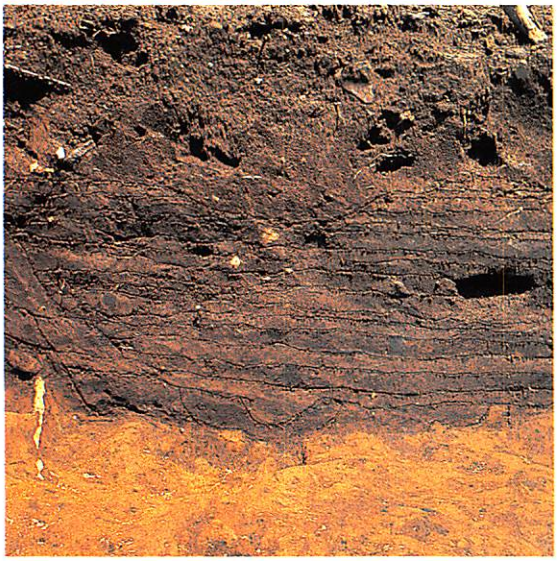
―肥後国分寺跡の建物基壇―

天平13年(741年)に聖武天皇の詔により、各国に国分寺・国分尼寺が建立された。現在までに数次にわたる調査が行なわれていて、故松本雅明氏（元熊本大学名誉教授）により伽藍配置も推定されているが、いまだその全容は不明である。

今回の調査区の西側は、塔跡と推定されている地点であるが、調査区東側で建物の基壇と考えられる掘込地業が確認された。地業は上部がかなり削平されているが、基壇の北西コーナー約40㎡が検出された。その構造は1から5㎝の厚さの、砂と粘土との混合土で、交互に敷き詰めたりしながら11から18枚以上積み重ね「版築」されていた。

昭和63年に熊本市教育委員会が行なった東側隣接地の調査でも、同様の地業が検出されていて、その際は二時期の地業が検出されている。混入物の入り方などにより創建期と再建期のものと区別できたが、今回検出された地業も、同一のものと考えられる。それと合わせると東西の長さ約18m、南北約15m以上を測りかなり大きな建物の基壇であったことが窺え、国分寺の伽藍に直接結びつくような、非常に重要な建物跡（塔・金堂・講堂など）ではないかと考えられる。こうした調査結果は、肥後国分寺の伽藍配置を考えるうえで重要な成果を得ることができた。　（赤星　雄一）

▲地業を平面で検出した状況（左側の黒い部分が地業の残り）



▲地業版築層断面（土の積み重ねが良く分かる）

▲出土した国分寺創建時に使われていた軒丸・軒平瓦

▲国分寺跡伽藍推定範囲

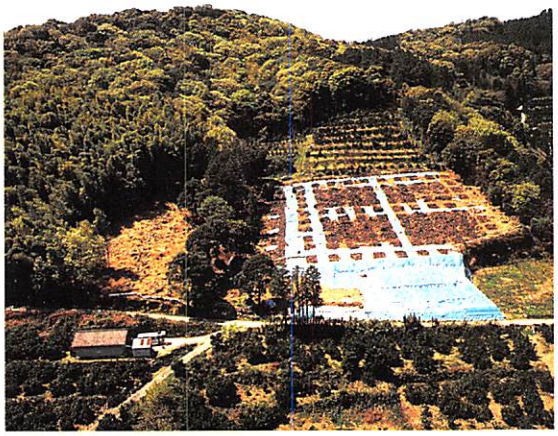
池辺寺跡（熊本市池上町西平山）

この遺跡は熊本市の西部、池上町字西平山を中心に所在する平安時代初頭の山岳寺院跡である。昭和61年度から確認調査が行なわれ、国史跡に指定された百塚C地区には、基壇建物6棟とその背後に100基の石塔群が整然と配置されている。石塔群・建物群からは9世紀後半～末の土器が多く出土しており、廃棄の時期を示すものと思われる。近年は、周囲から他の遺構群も発見されていて、確認調査が続けられている。近接する山中に、「金子塔」と呼ばれる建武4年（1337）銘の石塔があり、その碑文に池辺寺の由来が伝えられている。百塚C地区の寺院跡はその碑文の内容と合致するものであるが、池辺寺の長い歴史の中のひとこまにすぎない。

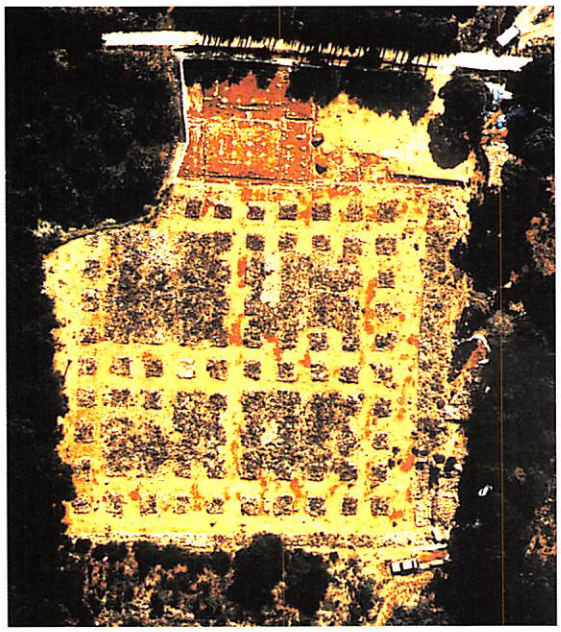
現在、百塚C地区の保存・整備とともに、池辺寺の変遷過程の解明や景観の復原についても重要課題として取り組んでいる。

（網田　龍生）

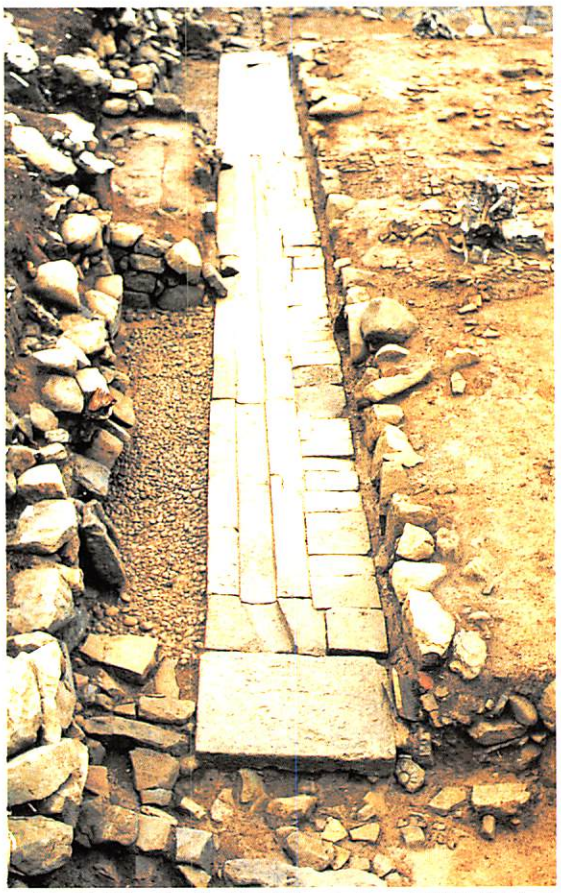
▲基壇建物群と石塔群（上空から撮影）



▲遺跡の現況（百塚C地区）　建物跡はシートで覆っている。



▲基壇建物群　2棟の建物は削られている。



▲本堂建物背後の溝　溝は凝灰岩製で、その脇には玉砂利が敷かれている。

▲石塔　一辺2.4mの方形に積まれている。

▲金子塔

◀出土した鬼瓦
（平安時代初頭）

▲灯明皿を大量に投棄した土壙（9世紀後半）

うその谷遺跡（八代市奈良木町）

ー近世の瓦窯と古代の炭焼窯ー

八代市の南東の山麓部に位置する。今回の調査で、2基の瓦窯と3基の横口付炭窯を確認した。瓦窯は、近世と近代のものが1基ずつで、そのうち1号窯は瓦窯には珍しい連房式の登窯で、復原すると全長13m・勾配20度を測る。この窯で焼いた軒丸瓦や軒平瓦の文様は九曜文のみで、表目面に釉薬が施されている。また、年代測定の結果は17世紀前半にあたることから、この窯の築造は細川忠興（三斎）の八代入城に関連するものと見られる。2号窯は平地式の窯で、燃焼部と焼成部が対になっている形から、通称「達磨窯」と呼ばれている。出土した瓦は、「岡田製」の刻印があったが、地元とのつながりは今のところ不明である。市内では近世初期の麦島城に関わる達磨窯も出土しており、これらは瓦生産について重要な資料となっている。

3基の炭窯は製鉄に必要な木炭を焼成するものであり、九州においては22例目、県下では初の出土である。長さ11～12m、斜面を利用して6～9度の勾配がつけてある。年代測定と出土遺物から7～8世紀頃に作られた窯である。炭窯の近くに製鉄遺跡があるのが一般的であり、今後この遺跡の周辺で製鉄炉などの遺構が発見される可能性が大きい。

（吉永　明）

▲うその谷1号窯跡　全体は3室からなる登窯で、1室は8段の階段状になっている。3室のうち上下の2室が壊されている。

▲1号瓦窯出土軒丸瓦
細川家の家紋である九曜文がついている。

▲1号瓦窯出土軒平瓦
表面に灰の釉薬をかけて焼いてある。

◀うその谷2号瓦窯
瓦窯に一般的な平地式の「達磨窯」である。

うその谷3号炭窯▶
斜面を利用した半地下式の炭窯で横口を持つ。

皮籠田A窯跡（荒尾市平山字皮籠田2276-4）

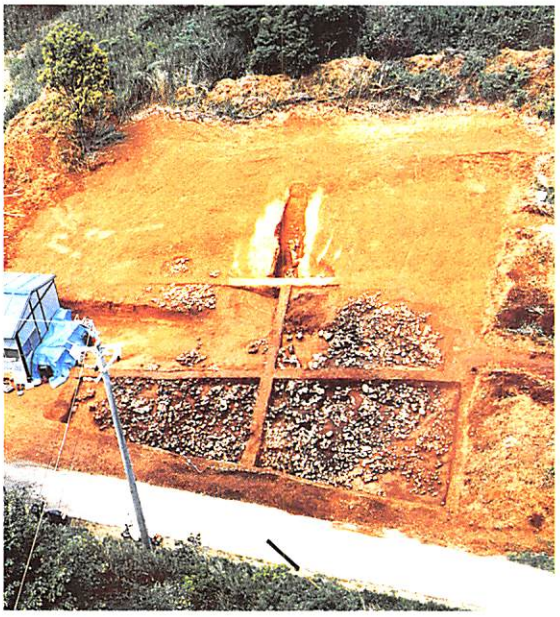
本遺跡は宅地造成に伴い、平成７年３月１日から８月30日まで荒尾市教育委員会が調査を実施した。本市地域における窯業の生産活動は古代から中世初頭にかけて活発に行われ、県下でも最大の窯跡群（荒尾窯跡群）が形成されている。

荒尾窯跡群は１小岱支群　２袴嶽支群に大別される。皮籠田A窯跡は袴嶽支群に含まれ、窯本体は緩斜面に築かれ谷川側に灰原が残っていた。

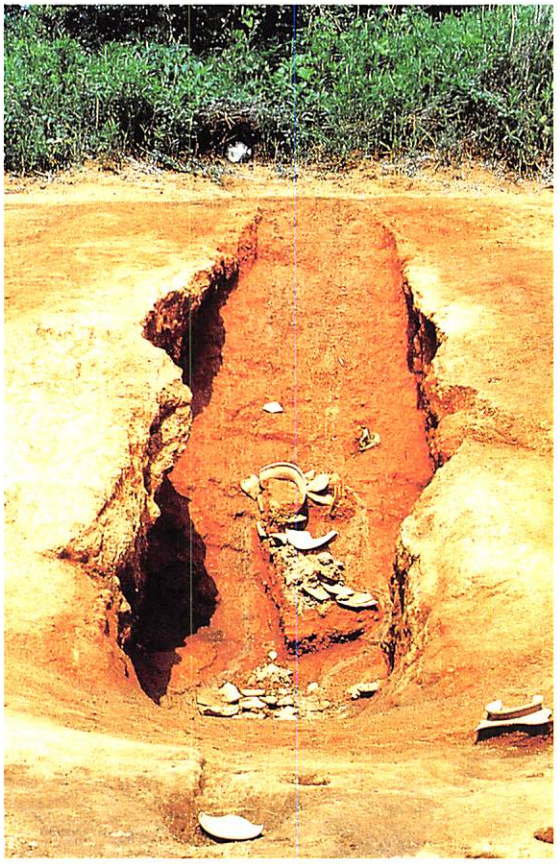
窯は全長8.0m、焼成部最大床幅175cm、焼成部傾斜角37°である。灰原から多量の須恵器片が出土した。須恵器の器種は甕（大型、小型）、壷、杯、高杯、皿などの日常雑器である。

窯址の年代は荒尾窯跡群が最盛期を迎える８世紀の第３～４四半期と推定する。

（勢田　廣行）



▲遺跡の全景



▲窯全体景

▲窯と灰原

熊本大学構内遺跡（黒髪町遺跡）

（熊本市黒髪2丁目39-1・40-1内）

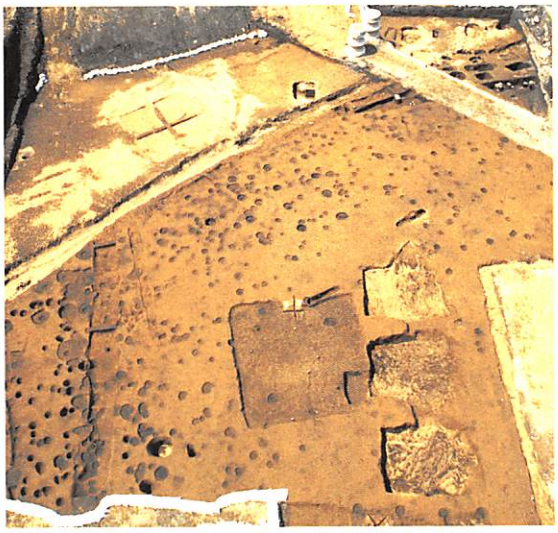
熊本平野北西部にそびえる立田山(151.6m)の南西部、白川右側に展開する河岸段丘上(12～25m)に位置する。1995年より実施された構内再開発に伴う発掘調査によって、縄文時代後期～近世に至る複合遺跡であることが判明した。

遺跡の中心をなすのは、古代8～9世紀頃の遺構群で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、それを区画する東西・南北に方位をとる区画溝などが発見されている。本学構内は、飽託郡家の式部一族の居館跡や古代駅制の「蚕養駅」の推定地である。一般農村とは異なる規格性の強い建物群や、ここから出土した「馬」銘のヘラ書土器や「國」銘の土製印(逆印)などの出土は、一帯に官衙的施設及び識字層の居住地が存在していたことを窺わせており、将来的な調査によって、官衙の中心的施設が発見される可能性がある。

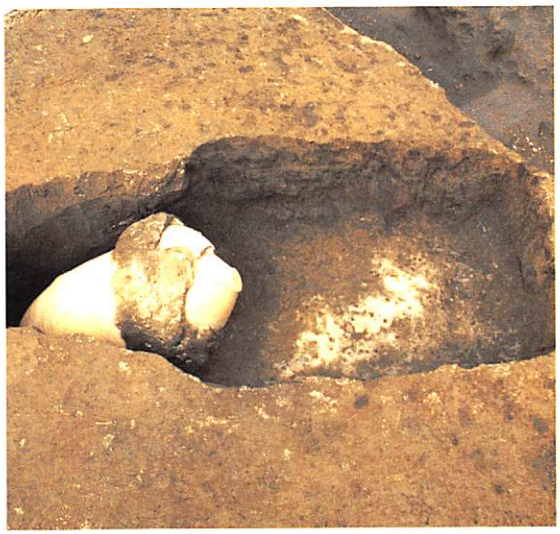
さらに、9704地点では昭和32年に発見された坪井古屋敷甕棺墓遺跡に連なる須玖式甕棺と黒髪式土器で構成される弥生時代中期後半の甕棺墓群(約15基)が発見され、付近一帯に同時代の集落の存在が想定される。

また、白川下流左岸にある熊本大学医学部・附属病院内(本庄遺跡)でも古代道路や「杉本寺」銘のヘラ書き土器などを含む溝に囲まれた掘立柱建物や竪穴住居址、また渡鹿グラウンド(渡鹿遺跡)でも古代の竪穴住居跡や道路遺構などが検出されており、古代における託麻郡の様相が序々に明らかにされつつある。

（小畑　弘己）

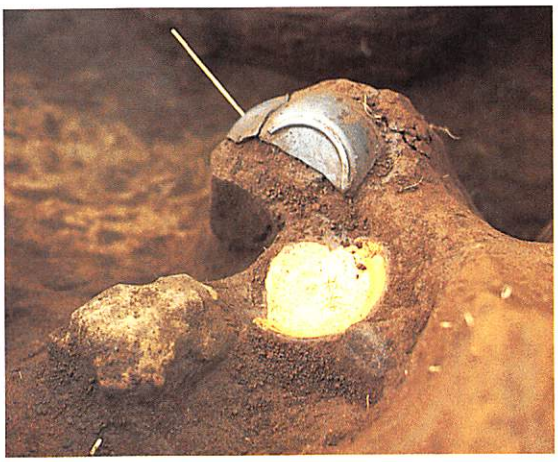


▲9704調査地点（黒髪町遺跡）の調査区全景　近世に角部分を破壊されているが、東西・南北に方形の区画溝がのびている。



▲同地点で検出された甕棺墓　割れた鉢蓋を他の甕棺の破片で覆い粘土で目張りをしている。

▲9601調査地点（本庄遺跡）検出の道路遺構　幅2mあまりの2本の溝で挟まれた道路が南北方向に延びていた。



▲同地点の「杉本寺」銘ヘラ書き土器出土状況　道路溝を掘り返した幅1m、深さ2mあまりの溝から多量の須恵器・土師器に混じって「杉本寺」、「佛」などと書かれたヘラ書き・墨書土器が20点あまり出土した。

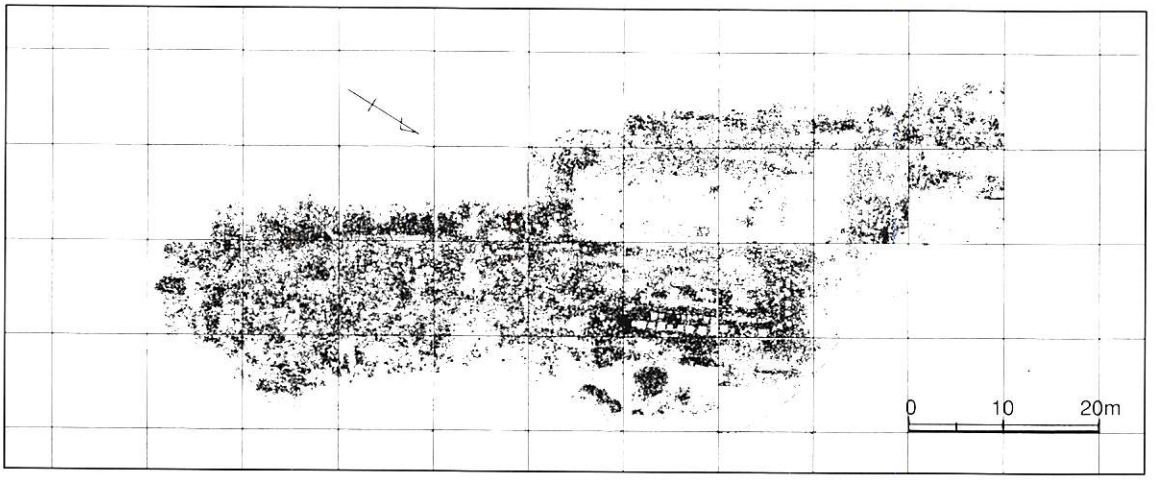
勝福寺古塔碑群（県指定史跡）

（球磨郡深田村荒茂）

ー大規模な敷石遺構群ー

勝福寺古塔碑群は、球磨郡深田村の北東、勝福寺本堂跡に向かって左側の山中に位置する。勝福寺は、平重盛の菩提を弔うため建立したとの伝承がある。古塔碑の時期としては、紀名年により鎌倉時代から江戸時代にかけて製作されており、その量規模とも県内では最大であり、中世墓を研究するうえで貴重な遺跡とされている。

▲勝福寺跡航空写真



▲敷石の分布

調査は、平成７年度に雑木の伐採と既存石塔の現況調査を実施し、発掘調査は平成８年度から国庫補助事業でとして、埋没する五輪塔のほか板碑や敷石の分布調査を実施した。

これまでの調査で、多量の五輪塔をはじめ、宝・層塔類の相輪、笠や供献用の土師器が出土した。また、石塔の基礎となる敷石を検出したが、その広がりは墓全域を覆うほどに大規模であり、幾世代にわたって築かれされ重なりあうものも見られた。特に室町から戦国時代にかけてピークを迎え、江戸時代には、阿弥陀堂を中心として五輪塔や板碑をコの字に配置していたことがわかった。一部は復原・整備を行なっている。発掘調査は、表土を除去した段階にあり、今後塚や敷石の地下遺構を調査する予定である。　（北川　賢次郎）

▲裏石遺構状況写真

塔ノ本遺跡（鹿本郡植木町大字轟字塔ノ本）

この遺跡はかつて、弥生時代の墳墓の一つである支石墓が、調査されたことで知られている。菊池川下流に注ぐ木の葉川の支流に面する台地上に位置し、隣接して「戦跡・田原坂」に通じる道が東西に通る。この道は南北にはしる延喜式官道に関係する伝路と言われており、また小河川も多く、本遺跡付近は水陸交通の一拠点だったと思われる。今古閑・久保遺跡、ヲスギ遺跡や土師器焼成土壙が検出された田子山遺跡などとの関係が深い遺跡である。

調査では縄文時代遺物のほか平安時代の掘立柱建物跡や土壙墓を検出した。水注は口縁部などを失っていたものの、優美な瓜形の胴部は完形で緑青褐色の釉が美しい。9世紀末頃のものであろう。この時期の水注としては日本国内でも5指に入る優品である。出土状況や時期が特定できる点は極めて重要であり、山本郡分立の謎を解く鍵になるかも知れない。

（中原　幹彦）

▲青磁水注（中国越州窯）残存高21cm

▲水注出土状況　水柱が垂直に出土した状況がよくわかる。

▶水注が出土した3区1号土壙墓（南から）長さ2・2m、幅0・8m、深さ0・6m。頭位は北向きで、底部には多くの木炭が認められた。

▲遺跡全景（北から）谷向こうは今古閑・久保遺跡。奥に見えるのは金峰山三ノ岳。調査区左端が3区。

二本木遺跡群【第12次調査】（熊本市田崎本町4-18）

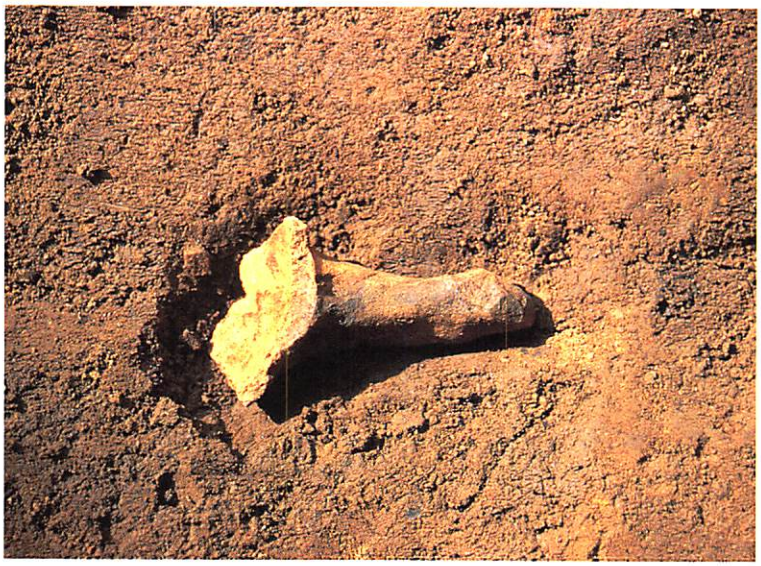
ー律令的祭祀に伴う遺物出土ー

白川下流域右岸の緩扇状地に位置する。調査面積約110㎡の狭い調査区の北側において、ほぼ東西に走る溝跡群が確認された。水性堆積を示しており、ここから多くの遺物が出土している。8世紀後半から9世紀前半の土器類を主体とし、銅鏡・陽物形の土器把手・越州窯系青磁水注（把手片）・馬の顎骨・銅滓などがみられる。これらは、恐らく律令的祭祀行為に伴い溝に破棄されたものと考えられる。

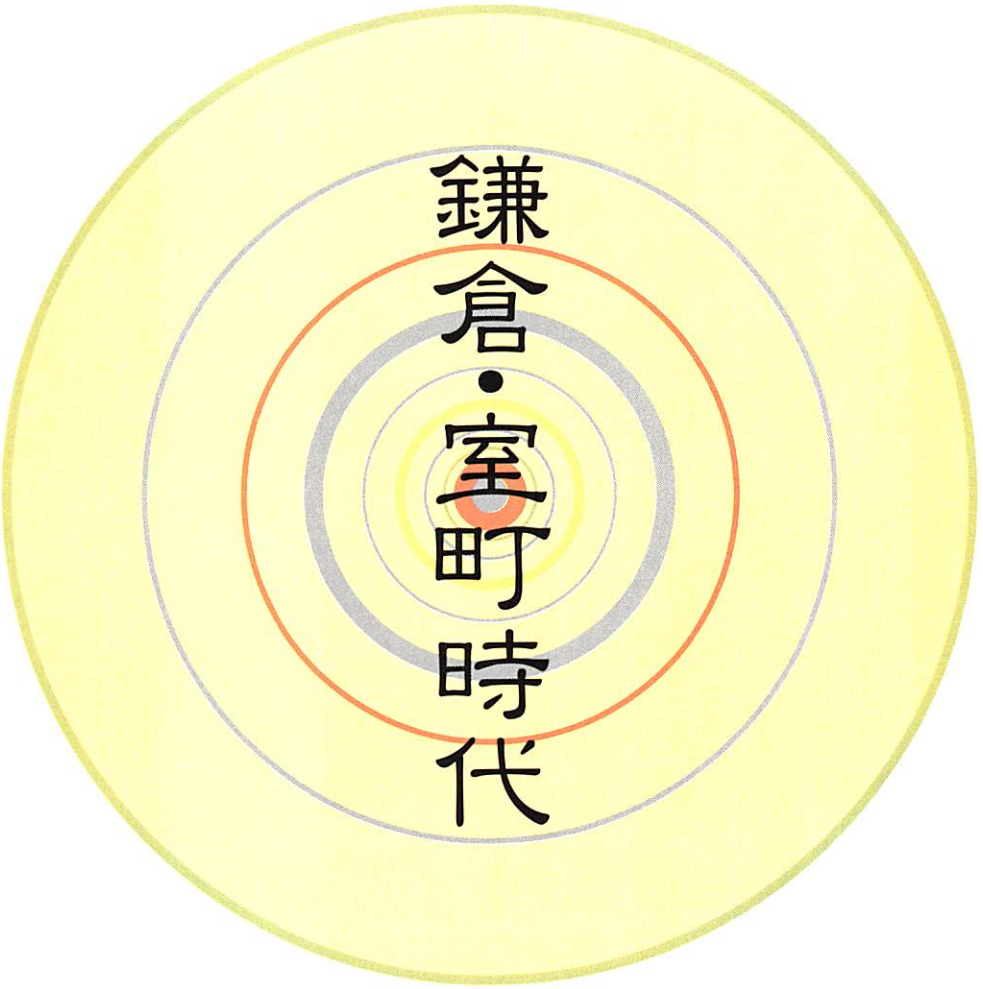
（美濃口　雅朗）

▲銅鏡…素文鏡。直径4.4cm、厚さ約1mm。県内初の出土例である。祭祀行為の際、木などに掛け、祭場の表示・浄化といった機能を果たしたのではないかと考えられている。

◀土馬…胴体部分の破片。現存長5.8cm。県内において幾つかの出土例が知られているが、本資料のように溝跡から出土したものは初例である。祭祀行為の際、最終的に壊し、溝に流したものと考えられる。



◀陽物形の土器把手…現存長約8cm。古代の甕・甑に通常みられる把手部分が男根を模した形態を呈する資料である。煤が付着しているが形態からみて日常品とは考えづらい。


鎌倉・室町時代

今古閑・久保遺跡（鹿本郡植木町大字轟字今古閑）

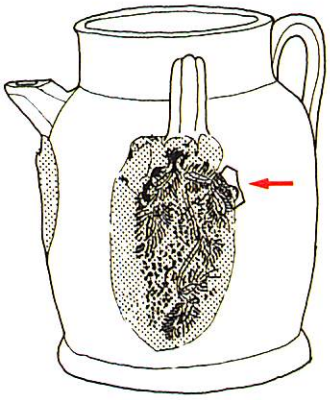
弥生時代中期

この遺跡は、塔ノ本遺跡と谷を隔てた南側に位置する今回の調査の契機となった事業に係る一連の遺跡である。調査の結果、弥生時代中期の住居跡が密集して検出され、東方約200mで昭和32年に出土した銅矛４本との関係が注目された。南接の滴水尖遺跡の成果等と併せて、付近一帯が弥生時代中期には大集落を形成していたことが次第に判明してきた。

調査区中央の大規模な堀状遺構からは、全国で70例ほどしかない中国唐代の黄釉褐彩貼付文水注片や青磁片、軽石製ミニチュア製品、銅椀片が出土している。この大堀は数回の掘り直しがあり、完全に埋まってしまった跡は畑として利用されていた。　（中原　幹彦）

▲調査区全景（南から）水注片などは画面左奥の調査区から出土。右奥の建物付近が塔ノ本遺跡。

▲黄釉褐彩貼付文水注片（中国長沙銅官窯）右図の矢印の部分にあたる。



▲参考図

◀銅椀片　つまみの部分か。

青磁片（劃花文碗、蓮華文碗）▶

▲軽石製ミニチュア製品と未完成品（中央の笠形は高さ3.5cm）ほかにも工具痕のある軽石や使用痕のあるもの、原石、削り屑などが多量に出土している。

縄文時代～平安時代

吉部原遺跡（よしぶばる）

（鹿本郡植木町大字今藤字吉部原）

この遺跡は、九州自動車道植木インターチェンジ横の平尾山（ひらおやま）から北に伸びる台地の先端にあり、合志川（ごうしかわ）支流の豊田川に面する。縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、特に奈良時代の住居跡が密集していた。台地中央が大きく削平されており、ほかにも多数の住居跡が存在した可能性が高い。南の塔ノ本遺跡などとは異なる、山本郡成立前夜の一般村落の姿をここに見ることができる。

（中原　幹彦）

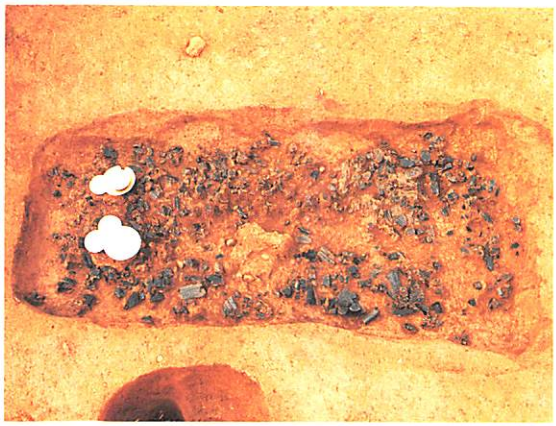
ヘラ書「馬人」人の名前だろうか。▶

▼遺跡全景　上空から東方菊池方面を望む。

灰塚遺跡（はいづか）

（球磨郡深田村字灰塚）

▲縄文時代の集石



▲12世紀の墓

灰塚遺跡は、土地改良事業の工事に先立ち調査が行なわれた。遺跡は、県南部の人吉盆地の中央に位置し、西に球磨川が流れている。

この遺跡からは、様々な時代の遺物が出土したが、なかでも前後二時期のものが出土しまている。一つは縄文時代早期（約10,000年〜8,000年前）で、人々の生活した跡である集石（しゅうせき）や土壙（どこう）、当時使用されていた多量の土器や耳栓（=耳飾り）（みみせん）等も見つかり、特に南九州特有の手向山式（なむけやま）土器が出土しており、最近注目されている南九州の縄文文化との関係が想定される。

もう一つ注目される時代は古代から中世（10〜13世紀）である。東西100m南北160mの範囲に、大型の掘立柱建物跡や墓壙が数多く確認され、多くの土師器・輸入磁器などが出土した。さらに、鉄製品を作る時に出る鍛冶滓（かじさい）や、木棺墓・建物に使った釘、鎧（よろい）の一部分等が出土し、豪族の館跡としての正確が裏付けられた。

（隈部　香織）

▼灰塚遺跡の全景の掘立柱建物がいくつも建つ

旧石器時代～近世

西原遺跡（球磨郡相良村大字深水字西原）

西原遺跡は川辺川右岸のシラス台地に立地している。ここからは、旧石器・縄文・弥生・古墳・平安・江戸の各時代に使われた道具が出土し、長期間にわたって人々が生活していたことが分かった。

縄文時代の遺物としては、主に狩猟に使う石器類が出土しその中でも石鏃が最も多かった。また石匙と呼ばれる携帯用のナイフも出土し、大きいものは縦6.5cm横7.5cmを測った。

縄文時代の西原遺跡は出土した遺物や住居跡がなかったことから、主に狩猟の場であったと考えられる。

平安時代の遺構としては土壙墓と呼ばれる素掘りの墓が発見された。その大きさは縦2.7

いろいろな矢じり・石さじ▶

▼空から見た西原遺跡

m、横１ｍを測り平面形は隅丸の長方形をなしていた。

土壙墓からは、土師器丸底の鉢形土器が出土している。土器の外面には黒いすすが付いており、煮沸きされていたことが窺え、また内面は表面がはげ落ちていてよく使い込まれていたようである。

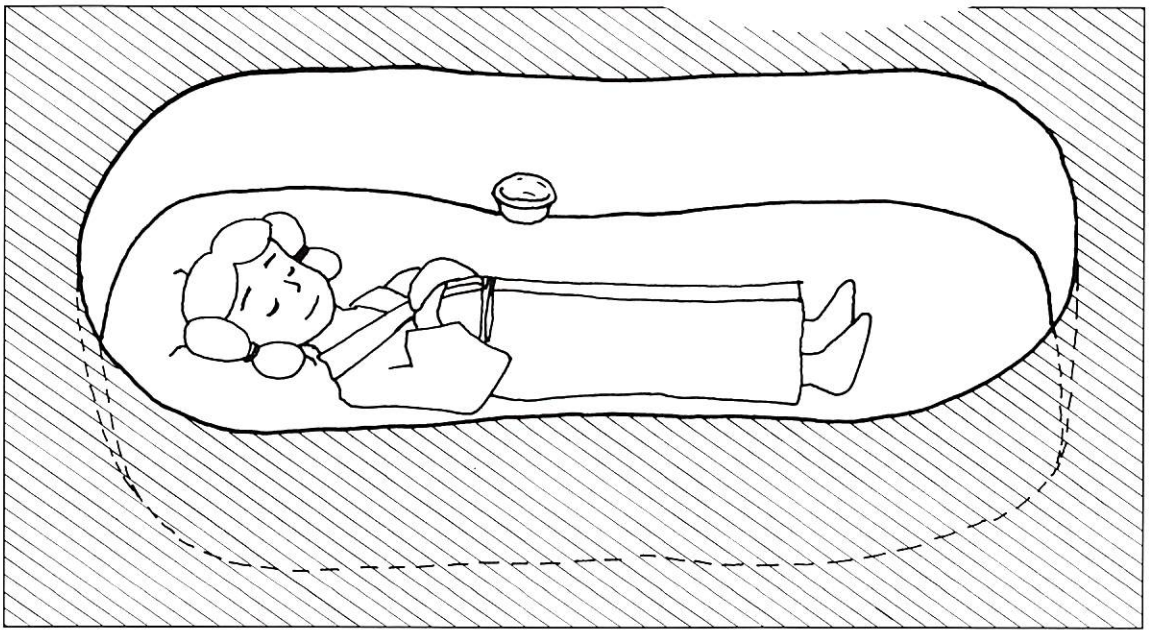
この土器と形状が類似したものは、鹿児島県で発見されていて、この事から埋葬された人と鹿児島県地域との間になんらかの交流があったと考えられる。

なお、墓中に人骨や棺などの痕跡は残されていなかったが、埋葬方法については他地域の類例から体を伸ばして木製の棺に葬られたと推定される。　（出合　宏光・中村恵子）

▲平安時代の墓

▼出土した椀

▼墓の想像図（棺は省略）



室町時代(南北朝期)

祇園遺跡

(阿蘇郡白水村大字一関字祇園647ほか)

祇園遺跡は、『吾妻鏡』などに記述された「南郷大宮司(阿蘇家)」館跡と推定されている。阿蘇氏は、古代において阿蘇谷に本拠地を置いていたが、中世に至り肥後国中央部への勢力拡大をはかる目的から本拠地移動を行なった。有明海に直結する白川上流域に位置し、旧街道上にある本遺跡は、交通の利便性から絶好の立地条件を持ったと思われる。遺跡からは、阿蘇家の盛時を窺わせるような多数の掘立柱建物跡と大量の輸入陶磁器が出土し、その中心的な建物からは地鎮の目的で埋められたと思われる磁州窯系鉄絵壷が完形で出土した。

(水野　哲郎)

▲磁州窯系鉄絵壷出土状況(写真は東より)
川原石で作った礎石建物のほぼ中心部の土壙より出土。口を南側に向け、壷を横に寝せた状態で埋められていた。中に宋銭を5枚ほど入れたうえ、口を布か紙のようなもので密閉してあり、建物の地鎮の目的で埋設されたものと思われる。

SB01▶
遺跡南側に検出された遺構で、礎石建物跡。遺構全体が検出されていないが、短辺9.5m、長辺9.5m(+α)の長方形のプランを持つものと思われる。周囲には側溝を持ち、内側には黄色土を使った簡易な基壇が確認できた。中央は磁州窯系鉄絵壷。

祇園遺跡空中写真
1,600㎡の調査区には掘立柱建物跡が36棟、礎石建物跡が1棟、竪穴式住居跡2基、溝5条、井戸2基、土壙15基の遺構が検出された。特に調査区南側には大型建物が集中し、柱穴底部に平石(礎盤)を敷く構造が特徴的である。
▼

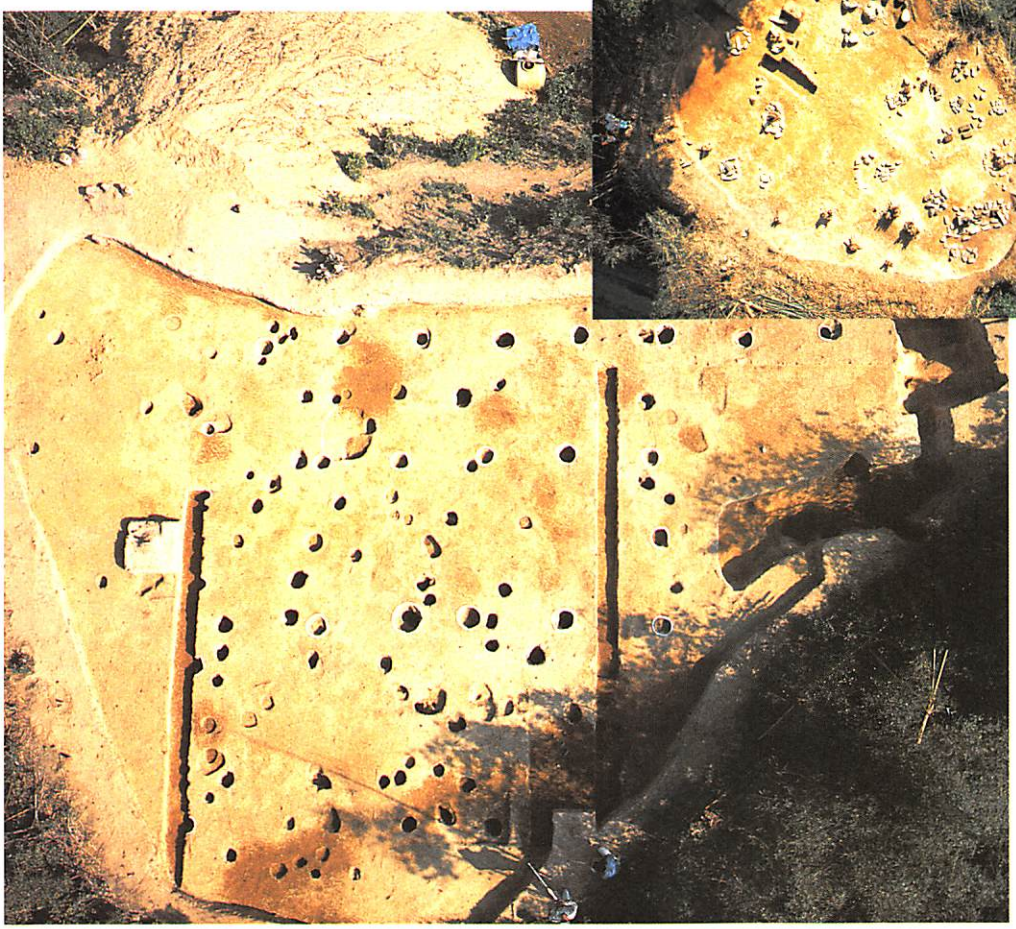
蔵城跡（球磨郡錦町大字木上）

蔵城跡は、球磨川と川辺川との合流点から5キロ程上流の球磨川北岸の独立丘陵上に立地している。この丘陵は中央がくぼみ、東側と西側に高台がある東西に長い地形で、下の道路からの高さが30mと比較的低い丘陵だが、シラス丘陵のため斜面部の傾斜はかなり鋭くなっている。この丘陵上には「蔵城」という字名が残され、中世山城の存在を裏付けていた。過去の調査では東側高台に掘立柱建物跡3棟や土塁などが確認され、さらに今回の調査でも西側高台に掘立柱建物跡1棟、柵跡や谷部を効果的に取り込んだ竪堀跡が新たに確認されている。遺物も青磁器や南宋銭などの舶載品をはじめ土師器、瓦器、すり鉢、土錘などが見つり、ほかに縄文時代、古墳時代の遺物や近世の遺物・遺構も確認されている。

（矢野　裕介）

▲北東方向から眺めた蔵城丘陵
校庭の右上が蔵城跡。上方に見えるのが球磨川で、その両脇に水田が広がる。右斜め上の方向に相良氏の本拠地の人吉市がある。

▼近世の墓所
17世紀頃から18世紀前半の墓所。計25基の墓穴が見つかる。副葬品の中には、中国産の磁器や青銅製の蓋などをはじめ国産磁器、土師皿、「寛永通宝」などが埋納されていた。



▲掘立柱建物跡と柵列
西側高台で見つかった建物（2間*4間）。建物に平行して上辺と左辺に柵列が並ぶ。この高台から西を一望できることから、この建物は見張り小屋であったと思われる。青磁器・土師器・土錘が見つかっている。

田中城跡（たなかじょう）

（玉名郡三加和町大字和仁字古城）

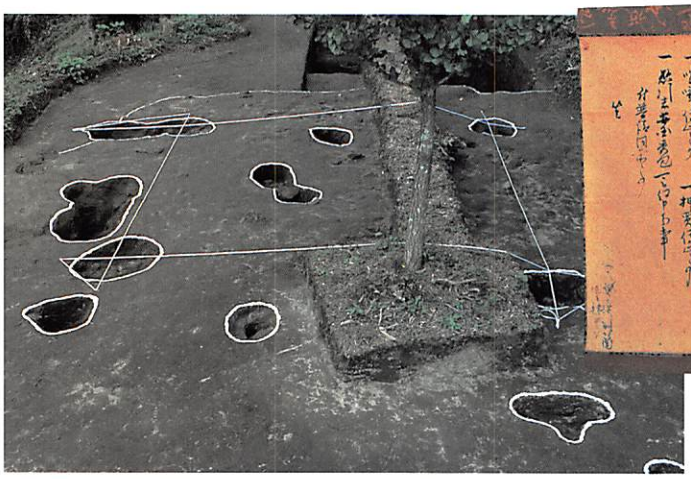
室町時代～安土桃山時代

和仁（かに）川流域には水田地帯が発達し、これを臨むような舌状（ぜつじょう）台地が各所に突き出している。この城跡の場合、台地の尾根を人工的に断ち切ることにより独立させ、城郭を形成している。

田中城跡は和仁一族の居城で歴史上に登場する確実な史料は廣瀬文書（ひろせもんじょ）の暦応（れきおう）三年（1340）の記事で、落城は柚留木文書（ゆるぎもんじょ）にある安国寺恵瓊（あんこくじえけい）が佐々成政（さっさなりまさ）に宛てた書状によって天正十五年（1587）十二月五日ということになる。

昭和61年４月に県指定史跡となったのを契機に始められた発掘調査も12年目を終了し、城の様子が徐々に解明されてきた。その結果、主郭では14棟の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、現地表から約６ｍ下方でようやく底が確認された空堀（からぼり）などが確認されたが、平成３年度からは平成元年に山口県立文書館で発見された『辺春・和仁仕寄陣取図』と対比させながらの調査を行ない、連棟式長屋跡（れんとうしきながやあと）・「弾正屋敷跡（だんじょうやしき）」と言い伝えがある場所からは、井戸跡が確認されひとつの生活域であったこともわかった。　（黒田　裕司）

▲東側から見た田中城跡全景



▲平成9年度の調査で確認された「やぐら跡」と思われる柱穴絵図と現況を対比して推定した場所の調査で確認され、絵図の信憑性が高まった。

▲「辺春・和仁仕寄陣取図」（山口県立文書館蔵・毛利家文庫絵図892）田中城の攻撃状況を表した絵図。周囲の陣には、小早川秀包・安国寺恵瓊・立花宗茂・鍋島直茂などの名が見える。

江戸時代

安土桃山時代～江戸時代

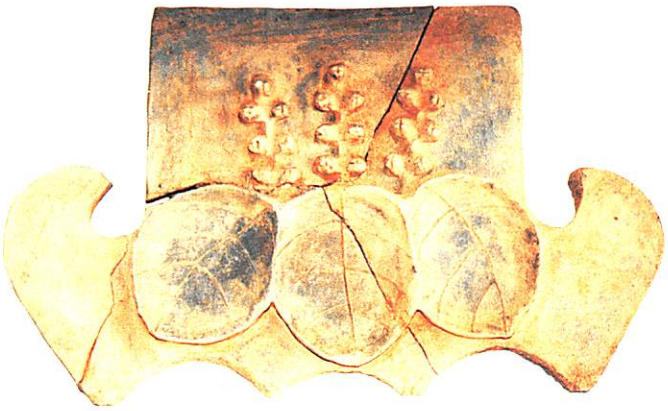
佐敷城跡（葦北郡芦北町大字佐敷字下町146番の1　ほか）

佐敷城は、佐敷地区の西側、佐敷川と湯浦川に挟まれた連続丘陵の北端、通称「城山」に立地する。城は16世紀後半に薩摩・島津氏への戦略拠点として築かれた後、数度の改修を受け城郭として整備されていく。しかし、17世紀前半（元和元年・1615年）一国一城令により城は壊され、その後石垣の一部は佐敷川の堤防工事などに使われたという。

平成３年から発掘調査により、総石垣造りの近世城郭であることが判明し、礎石を伴った大規模な門跡や大量の瓦が出土した。また崩された石垣の隅角部や、取り除かれた石段、積み重なった瓦の下に丁寧に置かれた鬼瓦などから城の壊し方（破城）の実態を窺い知ることができる。（深川　裕二）

▲追手門内の瓦の出土状況
門内からは建物の柱をのせる礎石、大量の屋根瓦が確認された。瓦を取り除くと排水溝が見つかり、溝底から「天下泰平国土安穏」銘入鬼瓦が出土した。

▲「天下泰平国土安穏」銘入鬼瓦と出土状況
「天下泰平～」銘入鬼瓦は縦25.5cm、横36.5cmの大きさで追手門上に飾られていたと推定され、字体や使用法などから、加藤家と関係ある高僧の作と考えられる。現在、この文字入りの鬼瓦の出土例は他にない。

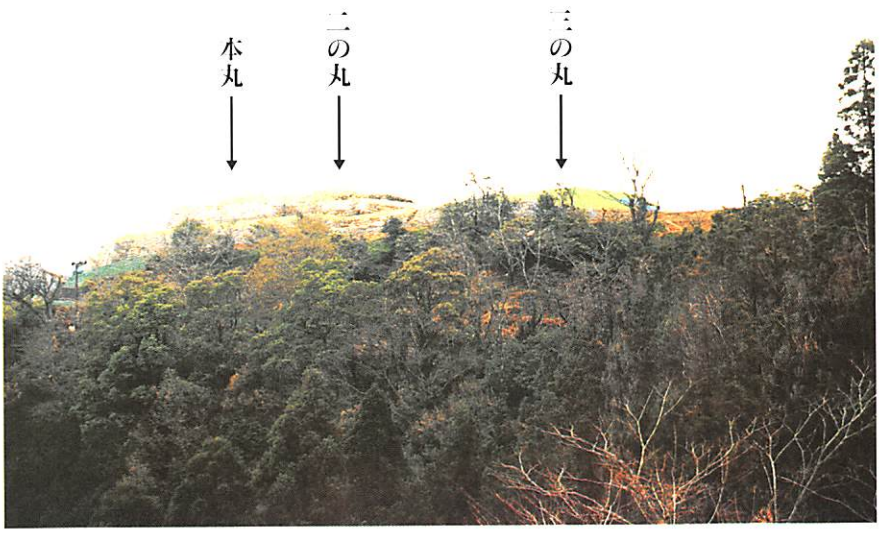


◀「桐紋入鬼瓦」
縦40cm、横69cmの巨大な鬼瓦。桐紋は花の数が多く、豊臣秀吉が家紋として使用した太閤桐である。当時は特に許されたものだけが使用できた。
発掘調査により、桐瓦と文字瓦は大量の瓦の下に丁寧に置かれていた。2枚の瓦は特別の扱いを受けていたようで、破城の際に取り行なわれる儀式の存在が推測される。

▲釘抜紋（？）鬼瓦と軒丸・軒平瓦
釘抜紋鬼瓦は城代加藤重次の家紋をかたどったものと考えられる。
また、軒平瓦は2種類、軒平瓦は5種類が確認されている。

鯱瓦▶
非常にユーモラスな表情をしている。

◀佐敷城遠景
本丸・二の丸・三の丸が南東方向に階段状に配置される連郭式の縄張りである。



参考文献

芦北町教育委員会『佐敷花岡城Ⅲ』－佐敷花岡城本丸西側石垣下・三の丸発掘調査概報－

今田治代「物見櫓古墳の調査について」肥後考古学会第211回例会資料'97.4.12

美濃口雅朗「水源地遺跡(江津湖遺跡群)第3次調査概要」肥後考古学会第211回例会資料'97.4.12

古森政次「菊池市木柑子高塚古墳から石人発見！被葬者の生前の祭儀をあらわすものか？」肥後考古学第214例会資料'98.3.28

熊本県教育委員会・玉名市教育委員会　平成9年度(第4回)柳町遺跡説明会資料『木器が語る古代の村』'98.2.28・3.1

『発掘速報展』～最近話題の出土品たち～大阪'98 近つ飛鳥博物館

展示品一覧

出土遺跡名	名称	点数	時代	所有・保管者
石の本遺跡	局部磨製石斧	1	旧石器時代	熊本県教育委員会
〃	局部磨製石斧刃部片	3	〃	〃
〃	ナイフ形石器	5	〃	〃
〃	狸谷形ナイフ形石器	8	〃	〃
〃	三稜尖頭器	1	〃	〃
〃	原ノ辻型台形石器	4	〃	〃
〃	敲石	1	〃	〃
〃	接合資料	9	〃	〃
小浜遺跡	阿高式土器	2	縄文時代後期	五木村教育委員会
〃	並木式土器	1	〃	〃
鶴羽田遺跡	土偶	1	〃	〃
〃	注口土器	1	〃	〃
〃	石棒	1	〃	〃
〃	十字型石器	3	〃	〃
五丁中原遺跡	甕	1	弥生時代後期	熊本市教育委員会
〃	壷	1	〃	〃
〃	複合口縁壷	1	〃	〃
〃	鍔付鉢	1	〃	〃
〃	ジョッキ形土器	1	〃	〃
〃	深鉢	1	〃	〃
〃	浅鉢	2	〃	〃
白藤遺跡6次調査	青銅鋳型	1	弥生時代中期	熊本市教育委員会
〃	鋳形石膏型	2	〃	〃
〃	勾玉	1	〃	〃
水源地遺跡3次調査	青銅鏡	1	古墳時代	〃
〃	鉄製刀子	1	〃	〃
柳町遺跡	組み合わせ式ねずみ返し	1	古墳時代	熊本県教育委員会
〃	鳥形木製品	1	〃	〃
〃	素弓	1	〃	〃
〃	鍬	3	〃	〃
〃	組み合わせ先鍬	1	〃	〃
〃	組み合わせ式二又鍬	1	〃	〃
〃	横づち	1	〃	〃
〃	剣形木製品	1	〃	〃
〃	紡錘車	一式	〃	〃
〃	鋤	1	〃	〃
〃	ねずみ返し	1	〃	〃
〃	脚付盤	1	〃	〃
物見櫓古墳	垂飾付耳飾り	1	古墳時代中期	竜北町教育委員会
中ノ城古墳	埴輪(円筒)	1	〃	〃
木柑子高塚古墳	石人	4	古墳時代後期	熊本県教育委員会
一ノ谷横穴墓群	彩釉壷	1	〃	熊本市教育委員会
椿原古墳	甕	1	古墳時代終末	宇土市教育委員会

出土遺跡名	名　称	点数	時　代	所有・保管者
椿原古墳	高杯	3	古墳時代終末	宇土市教育委員会
〃	高杯蓋蓋	1	〃	〃
〃	台付長頸壷	1	〃	〃
〃	台付短頸壷	1	〃	〃
〃	短頸壷	1	〃	〃
〃	瓻	2	〃	〃
〃	高台付椀	1	〃	〃
〃	杯	1	〃	〃
〃	椀	1	〃	〃
鞠智城跡	軒丸瓦	1	奈良時代	熊本県教育委員会
〃	丸瓦	2	〃	〃
〃	平瓦	2	〃	〃
〃	丸瓦(復原)	1	〃	〃
〃	平瓦	1	〃	〃
国分寺8次調査	軒丸瓦	1	奈良時代	熊本市教育委員会
〃	軒平瓦	1	〃	〃
二本木遺跡群12次調査	男根形甑把手	1	平安時代	〃
〃	土馬	1	〃	〃
池辺寺	鬼瓦	5	平安時代	熊本市立熊本博物館
皮籠田A窯跡	須恵器　壷	2	平安時代	荒尾市教育委員会
〃	〃　高台付椀	1	〃	〃
〃	〃　高杯	3	〃	〃
〃	〃　杯	2	〃	〃
〃	〃　蓋	4	〃	〃
〃	〃　皿	1	〃	〃
塔ノ本遺跡	越州窯青磁水注	1	平安時代	植木町教育委員会
祇園遺跡	磁州窯壷	1	鎌倉・室町時代	熊本県教育委員会
二本木前遺跡	白磁椀	3	〃	〃
〃	白磁皿	1	〃	〃
〃	土師器	1	〃	〃
今古閑・久保遺跡	黄釉褐彩貼付水注片	2	鎌倉・室町時代	植木町教育委員会
〃	軽石製品	6	〃	〃
ヲスギ遺跡	椀	2	〃	〃
〃	皿	4	〃	〃
田中城跡	天目茶椀	2	安土桃山時代	三加和町教育委員会
〃	白磁椀	2	〃	〃
〃	染め付け皿	2	〃	〃
〃	鉄砲玉	10	〃	〃
〃	土師器小皿	5	〃	〃
佐敷城跡	文字入り鬼瓦	1	〃	芦北町教育委員会
〃	太閤桐鬼瓦	1	〃	〃
〃	隅立角紋入鬼瓦	2	〃	〃
〃	鯱	1	〃	〃

写真・図録目録

番号	表　　題	遺　跡　名	撮影・提供先
1	空から石の本遺跡全景	石の本遺跡	熊本県教育委員会
2	旧石器遺物出土状況	〃	〃
3	〃	〃	〃
4	局部磨製石斧出土状況（遠景）	〃	〃
5	〃　（近景）	〃	〃
6	狸谷型ナイフ形石器出土状況	〃	〃
7	三稜犬頭器出土状況	〃	〃
8	上流対岸から見た小浜遺跡	小浜遺跡	五木村教育委員会
9	遺跡調査風景	上中原遺跡	菊陽町教育委員会
10	土偶出土状況	〃	〃
11	空から見た鶴羽田遺跡	鶴羽田遺跡	熊本県教育委員会
12	1号住居跡の検出状況	〃	〃
13	石棒出土状況	〃	〃
14	土偶出土状況	〃	〃
15	注口土器出土状況	〃	〃
16	江戸時代水路状遺溝	ぬきや遺跡	西原村教育委員会
17	古墳時代の住居跡	〃	〃
18	遺構配置図	神水遺跡	熊本市教育委員会
19	溝で区画された甕棺墓群	〃	〃
20	甕棺内人骨出土状況	〃	〃
21	弥生時代の墳丘墓	前原長溝遺跡	菊水町教育委員会
22	弥生人骨	〃	〃
23	甕棺	〃	〃
24	人工変形頭蓋（前面より）	〃	〃
25	人工変形頭蓋（側面より）	〃	〃
26	空から見た五丁中原遺跡	五丁中原遺跡	熊本市教育委員会
27	小型仿製鏡	〃	〃
28	巴形銅器	〃	〃
29	環壕跡	〃	〃
30	掘立柱建物跡	〃	〃
31	３号墳	〃	〃
32	３号墳周溝内墓壙	〃	〃
33	空から見た梅ノ木遺跡	梅ノ木遺跡	熊本県教育委員会
34	竪穴住居跡群	〃	〃
35	大型住居跡	〃	〃
36	壷棺出土状況	〃	〃
37	木棺墓出土状況	〃	〃
38	出土石器類	〃	〃
39	出土鉄器類	〃	〃
40	発掘調査風景	白藤遺跡	熊本市教育委員会
41	Ⅳ区21号土壙出土銅矛	〃	〃
42	Ⅳ区　出土鋳型（切先）	〃	〃
43	Ⅳ区　出土鋳型（湯口）	〃	〃
44	甕棺出土状況	〃	〃
45	Ⅲ区39号土壙（土壙墓）	〃	〃
46	Ⅳ区20号土壙	〃	〃
47	Ⅱ区27号土壙出土　動物遺体	〃	〃
48	Ⅱ区５号井戸	〃	〃
49	遺跡全景	方保田東原遺跡	山鹿市教育委員会
50	平成7年度調査全景	〃	〃
51	平成8年度調査出土の内行花文鏡	〃	〃
52	木棺墓検出	水源地遺跡	熊本市教育委員会
53	石棺検出状況	〃	〃
54	刳抜式木棺検出状況	〃	〃
55	調査地の遠景	柳町遺跡	熊本県教育委員会
56	各調査区の様子	〃	〃
57	鳥形木製品と平鍬	〃	〃
58	4号井戸跡	〃	〃
59	1号木製短甲の出土の様子	〃	〃

番号	表　　題	遺　跡　名	撮影・提供先
60	1号木製短甲と附属棒状留具	柳　町　遺　跡	熊本県教育委員会
61	棒状留具	〃	〃
62	棒状留具の文字	〃	〃
63	大型土墨内出土の古代の遺物	〃	〃
64	大型土墨	〃	〃
65	16号井戸(調査Ⅶ区)	〃	〃
66	空から見た上松山遺跡(第1次調査)	上　松　山　遺　跡	宇土市教育委員会
67	空から見た上松山遺跡	〃	〃
68	4号方形周溝墓	〃	〃
69	竪穴住居跡から出土した土師器	〃	〃
70	周溝からの遺物出土状況	〃	〃
71	赤色顔料を入れた土器	〃	〃
72	南東に開口する複室の横穴式石室	物　見　櫓　古　墳	竜北町教育委員会
73	空から見た物見櫓古墳	〃	〃
74	金銅製垂飾付耳飾り	〃	〃
75	空から見た迎原西遺跡	迎　原　西　遺　跡	城南町教育委員会
76	県内最古の竈	〃	〃
77	県内最古の竈付の住居跡の検出状況	〃	〃
78	小塚古墳(写真左手は経塚古墳)	小　塚　古　墳	天水町教育委員会
79	壷形埴輪	〃	〃
80	石人1出土状況(北より)	木柑子高塚古墳	熊本県教育委員会
81	石人出土状況(南より)	〃	〃
82	調査区完掘状況(西より)	〃	〃
83	最終閉口時に祭祀を行っている	つつじヶ丘横穴墓群	熊本市教育委員会
84		〃	〃
85		〃	〃
86		〃	〃
87	横穴墓群全景	瀬戸口横穴墓群	熊本県教育委員会
88	空から見た一ノ谷横穴墓群	一ノ谷横穴墓群	熊本市教育委員会
89	46号横穴墓検出状況	〃	〃
90	無頸壷出土状況	〃	〃
91	副葬品の鉄鏃と刀子	荻迫横穴墓群	西合志町教育委員会
92	副葬品の金環と様々な玉類	〃	〃
93	空から見た横穴墓群	〃	〃
94	横穴墓入口の閉塞石	〃	〃
95	前庭部の遺物出土状況	〃	〃
96	前庭部の遺物出土状況	〃	〃
97	横穴墓から出土したいろいろな土器	〃	〃
98	空から見た椿原古墳	椿　原　古　墳	宇土市教育委員会
99	空から見た椿原古墳(垂直写真)	〃	〃
100	主体部刳抜玄門	〃	〃
101	出土遺物	〃	〃
102	空から見た鞠智城跡	鞠　智　城　跡	熊本県教育委員会
103	池跡より出土した木簡	〃	〃
104	軒丸瓦(軒の先端に葺く丸瓦)の瓦当(文様のある部分)	〃	〃
105	池跡から見つかった建築材	〃	〃
106	〃	〃	〃
107	〃	〃	〃
108	地業を平面で検出した状況	国　分　寺　跡	熊本市教育委員会
109	地業版築造断面	〃	〃
110	出土した国分寺創建に使われていた軒丸・軒平瓦	〃	〃
111	国分寺伽藍推定範囲	〃	〃
112	素文鏡出土状況	二　本　木　遺　跡	熊本市教育委員会
113	胴体部分の破片出土状況	〃	〃
114	陽物形の土器把手	〃	〃
115	遺跡の現況(百塚C地区)	池　辺　寺　跡	熊本市教育委員会
116	基壇建物群と石塔群	〃	〃
117	基壇建物群	〃	〃
118	本堂建物背後の溝	〃	〃

番号	表　　題	遺　跡　名	撮影・提供先
119	石塔	池　辺　寺　跡	熊本市教育委員会
120	出土した鬼瓦	〃	〃
121	金子塔	〃	〃
122	灯明皿を大量に投棄した土壙	〃	〃
123	うその谷1号瓦窯跡	う　そ　の　谷　窯　跡	八代市教育委員会
124	1号瓦窯出土軒丸瓦	〃	〃
125	1号瓦窯出土軒平瓦	〃	〃
126	うその谷2号瓦窯	〃	〃
127	うその谷3号炭窯	〃	〃
128	遺跡の全景	皮　籠　田　A　窯　跡	荒尾市教育委員会
129	窯と灰原	〃	〃
130	窯全体	〃	〃
131	9704調査地点の調査区全景	熊本大学構内遺跡	熊本大学埋蔵文化財調査室
132	同地点で検出された甕棺墓	〃	〃
133	9601調査地点(本庄遺跡)検出の道路遺構	本　庄　遺　跡	〃
134	同地点の「杉本寺」銘ヘラ書き土器出土状況	〃	〃
135	勝福寺航空写真	勝福寺古塔碑群	深田村教育委員会
136	敷石の分布	〃	〃
137	敷石遺構検出状況	〃	〃
138	遺跡全景	ヲ　ス　ギ　遺　跡	植木町教育委員会
139	5区1号木棺墓(南から)	〃	〃
140	ナゾの金銅製品	〃	〃
141	木棺墓出土土器	〃	〃
142	青磁水注(中国越州窯)	塔　ノ　本　遺　跡	植木町教育委員会
143	水注出土状況	〃	〃
144	3区1号木棺墓	〃	〃
145	遺跡全景	今古閑久保遺跡	〃
146	黄釉褐彩貼付文水注片	〃	〃
147	〃　　参考図	〃	〃
148	銅椀片	〃	〃
149	青磁片	〃	〃
150	軽石製ミニチュア	〃	〃
151	馬人	吉　部　原　遺　跡	〃
152	遺跡全景	〃	〃
153	縄文早期集石検出状況	灰　塚　遺　跡	熊本県教育委員会
154	屋敷墓検出状況	〃	〃
155	空から見た灰塚遺跡	〃	〃
156	いろいろな矢じり・石さじ	西　原　遺　跡	相良村教育委員会
157	空から見た西原遺跡	〃	〃
158	出土した腕	〃	〃
159	平安時代の墓	〃	〃
160	墓の想像図	〃	〃
161	磁州窯系鉄絵壷出土状況	祇　園　遺　跡	熊本県教育委員会
162	SB01(建物検出状況)	〃	〃
163	空から見た祇園遺跡	〃	〃
164	東側から見た田中城跡	田　中　城　跡	三加和町教育委員会
165	『辺春・和仁仕寄陣取図』(山口県立文書館蔵)	〃	〃
166	平成9年度の調査で確認された「やぐら跡」と思われる柱穴	〃	〃
167	北東方向から眺めた蔵城丘陵	蔵　城　跡	熊本県教育委員会
168	掘立柱建物跡と柵列	〃	〃
169	近世の墓所	〃	〃
170	追手門内の瓦の出土状況	佐　敷　城　跡	芦北町教育委員会
171	「天下泰平国土安穏」銘入鬼瓦と出土状況	〃	〃
172	「桐紋入鬼瓦」	〃	〃
173	釘抜紋鬼瓦と軒丸・軒平瓦	〃	〃
174	鯱瓦	〃	〃
175	佐敷城跡遠景	〃	〃

展示協力者一覧(五十音順、敬称略)

芦北町教育委員会　荒尾市教育委員会　五木村教育委員会　植木町教育委員会
宇土市教育委員会　菊水町教育委員会　菊陽町教育委員会　熊本県教育委員会
熊本市立熊本博物館　熊本市教育委員会　熊本大学文学部考古学研究室
相良村教育委員会　城南町教育委員会　天水町教育委員会　西合志町教育委員会
西原村教育委員会　人吉市教育委員会　深田村教育委員会　本渡市教育委員会
三加和町教育委員会　八代市教育委員会　山鹿市立博物館　竜北町教育委員会

赤星 雄一　網田 龍生　池田 朋生　稲津 暢洋　岩谷 史記　今田 治代　今村 克彦
牛島　茂　浦田 信智　江本　直　大城 康雄　太田 幸博　岡本 勇人　小畑 弘己
金田一精　亀田　学　木下 洋介　清田 純一　黒田 裕司　隈部 香織　小谷桂太郎
古閑 敬士　坂田 和弘　澤田 宗順　島津 義昭　白菊 静子　勢田 廣行　高木 正文
高木 恭二　高谷 和生　鶴島 俊彦　出合 宏光　富田 紘一　中川 裕二　中原 幹彦
中村幸史郎　長尾 正香　西住欣一郎　林田 和人　平田 豊弘　廣田 静学　深川 裕二
福原 博信　古森 政次　帆足 俊文　益永 浩二　松本 健郎　村田 忠久　水野 哲郎
美濃口雅朗　美濃口紀子　宮崎 敬士　矢野 裕介　山下 義満　山下 宗親　山城 敏昭
吉永　明

ポスター・リーフレット製作
　印刷協業組合　サンカラー
展示パネル製作
　有限会社　あうん
展示図録印刷及びデザイン
　凸版印刷株式会社　九州事業部
展示品運搬
　ヤマト運輸株式会社　美術品福岡営業所

—平成10年度前期企画展—

熊本県立装飾古墳館展示図録第10集
「今どきの考古学」
—くまもと考古速報展—

発　行　日　1998年4月27日
編集・発行　熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県鹿本郡鹿央町岩原3085番地
TEL 0968-36-2151
FAX 0968-36-2120
印　　刷　凸版印刷株式会社　九州事業部

熊本県立 装飾古墳館

10教 熊古
⑥ 001

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第10集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：今どきの考古学
発行：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原3085番地
電話：0968-36-2151
URL：http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦2018年6月1日